短編集

吹雪桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
短編集

【Ｎコード】
Ｎ０３４９Ｑ

【作者名】
吹雪桜

【あらすじ】
短い話ばかり集めた部屋です。
ジャンルは様々。ＢＬやＧＬが入ることもあります。

短編1

そっと触れれば石に変わった。
生あるものは何でも石に変わった。
気づいたその日から、触れないように戒めた。
閉じ込められた石の塔の中、それでも触れないように気をつけた。

「ナンシー」

笑いかけてくれた初めての人。
あなたの笑顔を見ていたい。
いつまでも、いつまでも。

そっと塔の中から外を除いてみる。
笑うあなたがいた。
笑って手に触れて抱き合うあなた達がいた。

そっと触れれば石に変わった。
生あるものは何でも石に変わった。
気づいたその日から、何でも触れて石に変えた。
私のあなたが大切だから。
いつまでも笑ってほしいから。

そっと触れて…石に変えた。

短編2

『ラプンツェル。ラプンツェルや。お前の長い髪を垂らしておくれ』

養い親から渡された土産の絵本。それに少女は首を傾げた。
もう絵本を必要とする年ではない。
そんな養い子に男は、くくっと笑った。

「お前のようだろう？『ラプンツェル』」

高い塔の中に閉じ込められたラプンツェルと似ている状態にいる少女は、けれど不本意そうな顔をした。

「いつかな、お前の王子様のご登場は」

『お前のお腹の中の子をくれるというのなら許してやろう』

魔女は盗みを働いた夫婦にそう言った。
男はそんな要求をしたわけではなかったけれど、彼らは自らの安全を欲した。そのためにまだ話せぬ少女を差し出した。

「まさに、生贄だ」
「え？」
「いいや？」

『ラプンツェル、私と共に行こう。ここから連れ出してやる』
けれど翌日、そこにいたのはラプンツェルではなく、魔女でした。
『お前の小鳥はもういない。長い髪を切り落とし、荒野に捨てた』
そうして王子は塔の上から突き落とされ、茨の中へ。

進む物語。めくるページ。そうして絵本を閉じた少女は、王子様、
と呟く。
男は笑う。手を差し出して、芝居がかった口調で、さあ、と言葉を
紡ぐ。

「『私と共に行きましょう。塔から魔女から逃げ出して、私と幸せ
になりましょう。私のラプンツェル』」

少女がその手を包む。
取るのではなく、両手でそっと。
男が訝しげに眉を寄せた。

「私はその手を取らない。あなたが私の髪を切り落とさないように、
私を荒野へ捨てないように。あなたが傷つかないように。私は自由

を手放すわ」

「……馬鹿」

くすっと男が笑えば少女も笑う。
馬鹿でいいもの、と手を離して男の胸の中へ。
しっかりと抱きとめた男と幸せそうに。

『再会を果たしたラプンツェルと王子は幸せに暮らしました』

王子様なんて必要ないわ、と『魔女』の腕の中で『ラプンツェル』は笑った。
床に落ちた絵本は、もう二度と開かれることはないだろう。

短編3

『美しいお姫様は王子様を一目で魅了しました』

『硝子の靴を片方残したお姫様を探して国中の娘を訪ねていくと、ぴたりと合う方がおりました』

『王子様は探し出したお姫様と末永く幸せに暮らしました』

「私の王子様は、硝子の靴もなかった私を見つけてくれたわ」

「うん？」

隣で絵本を読んでいた少女の声に男が顔を上げれば、少女は絵本の表紙を撫でていた。

「地位も名誉もいらないの。名前さえ名乗らなかった私を見つけてくれたんですもの。それだけで十分」

微笑み男を見上げる少女に男も微笑む。

肩を抱き寄せれば抵抗一つなく預けられる体。

「愛しているよ。それで王子の反感を買ったとはいえ、君を手に入れられたのだから」

先に出会ったのは王子ではなく男。少女と二人、恋に落ちた。
けれど王子もまた少女に恋をした。
譲れなかった。譲りたくなかった。そうして男は少女を探して見つけた。

「ねえ、あなた。私にはもうドレスも硝子の靴もないただの灰かぶりだわ。それでも間違えずに私を見つけ出してくれたこと、とても大切な宝物なの」
「嬉しいね。君にそう思ってもらえるなんて」
くすくすと二人、笑い合う。
決して裕福な暮らしではないけれど、幸せそうに二人は笑う。

「王子と一緒になるより大きな幸せ見つけたの。愛しているわ、私の大切な王子様」

そうして口づけて、また笑った。

短編４（召喚。望まれない娘）

ある高校の部活帰り、少女は突然光に包まれた。
目を開ければ薄暗い石畳の上。座り込んでいる少女の目の前には男と少女と同じくらいの綺麗な少女。
一体何が、と混乱する少女を見て、目の前の少女が目を見開いて、そしてうつむいた。男はため息をひとつ。そして冷たく言った。

「失敗だ」

その一言で少女は持っていた鞄だけを側に、外に放り出された。
投げ飛ばされたせいで地面に擦った足が痛かった。ガシャンッという音に振り向けば大きなドア。押しても引いても叩いても開かないドア。
背後には森があった。暗い暗い森。鳥や獣の声が聞こえる森。右を見ても左を見ても森以外見えなくて。それが混乱している頭に恐怖を植え込んだ。
ここはどこだろう。私に一体何が起こったんだろう。分からない。
何も何も分からない。
こわい、こわい、こわい！！
溢れる涙は、突然振ってきた雨に消された。

勇者が現われた。
そう国中が歓声を上げている。
神殿の巫女が神に祈りを捧げる中、現われたのだという勇者はこの世界にとっての救い主だ。
魔王に脅かされるこの世界を救ってくれる唯一の。

けれどそんな喧騒など知らぬふり。男は道中かけられる声に、けれど急ぐふりで謝って。腕には食材が入った袋を抱えて。ただただ家に向かって。
それを声をかけた誰もが笑って見送る。
ああ、相変わらずあの男は愛妻家だと。溺愛する妻と少しでも離れることを厭う奴だと。
だから男が自分達よりも妻を優先することも納得するだけで。たとえ話題が勇者のことであろうと、男にとって妻以上には為り得なくて。それ以外の理由など思いもせずに。

そうして見送られた男が家のドアを開ける。
表の喧騒が嘘のように静かな家。いつもならば笑顔で迎えてくれる妻もいない。
男は袋をテーブルの上に置くと、足早に寝室へと向かう。そして軽

くノックをして声をかける。

「アオイ」

「…ディ？」

ああ、と小さな声に答える。そしてドアを開ければ、ベッドの上でシーツを頭から被った妻がいた。
振り向くその顔は酷い。泣きはらした目が痛々しくて、男はそっと妻を抱きしめる。

「ただいま」
「おかえり、なさい」

抱き返してくる妻は今、外に出られない。出られる精神状態ではない。
外は勇者一色。勇者、勇者、勇者。それが妻には苦痛だ。嫌でも思い出していまうから。

「ごめ、なさ」
「いい」
「でも、もう三年も経つのに」
「それでも、いい」

お前は何も悪くない。何も、何も。
ぎゅうっと抱きしめて、思い出すのは暗い暗い森の中、服も髪も肌もボロボロになって怯えているまだ妻ではなかった少女の姿だ。
人が住めるような森ではなかった。そこは獣が競い合う危険な森だった。どうしても入らなければいけなかったから入った男は、そこ

で人を見るとは思ってもみなかった。それも身を守る術など何一つもたない少女を。

少女は逃げた。男を見て、怯えて逃げた。思わず追いかけて捕まえた腕は細くて。とても戦えるような腕ではなくて。

半狂乱に陥った少女を必死で宥めて、宥めて、宥めて。気を失った少女を家に連れて帰って。けれど落ち着いて事情が聞けたのは、それから二日も経ってからのことだった。

佐々木葵、当時十五歳。

男、ディランより五歳年下の少女は、異なる世界の住人だった。

葵は神殿の巫女と国の宰相の前、召喚によってこの国に招かれた、いや呼び間違えられた。そうしてそれを理解する前に城の裏に放り捨てられた。

目の前には厚い扉。後ろには獣の咆哮が響く暗い暗い森。選ぶならば前者だ。扉を叩く方を選ぶ。

けれど開けられた扉から与えられたものは剣を持って追い払おうとする兵士の姿だ。それから逃げて逃げて入ってしまった森。引き返す道も分からない。引き返してもまた振り上げられるだろう剣から足は引き戻ることをしない。けれど進めば進むほど暗くなる森。そして遭遇する獣から逃げて逃げて逃げて。

ディランと会ったのはその二日後だった。運がよかった。その日まで雨が降り続いていたのもよかったのだろう。ほとんどの獣は巣穴から出なかったのだから。

けれど葵は身も心もボロボロで。ディランに慣れても他の人間に慣れなかった。今はようやく慣れて、笑って毎日を過ごせるようになって。

なのに。

「こんな国の外れまではこないさ」

葵と違って歓迎される勇者も、呼び出しておきながら、葵に死ねと言わんばかりに森へ放り出した巫女や宰相、城の人間も、城に怯える葵を連れて移り住んだこの町にはやってこない。現に今まで一度もやってこなかったのだ。この先もきっとない。
だから今はあの頃を思い出して怯えても、またゆっくりと笑顔を見せてくれるようになればいい。

「ディ」
「ああ」

だから、と妻を腕に、窓を睨みつける。

決してこの町には立ち寄るな。

短編５（短編４と同設定。望まれなかった男）

勇者が現われた、と騒ぐ声。それに浴びせる嘲笑。
だってそうだろう、と男は思う。

あれはもう二十年も前のことだ。男はまだ六歳だった。友達と遊んで帰る途中だった。
走って、今日の夕飯はハンバーグだからと心躍らせて家のドアを開けようとして光に包まれた。
思わず目を瞑って、次に開けた時は冷たい冷たい石畳の上にいた。
さっきまで目の前にあった家のドアはどこにもない。

目の前にいたのは母親くらいの女性と祖父くらいの男。
女性が困ったように隣の男を見て、隣の男は眉を寄せた。そして言った。

「失敗か…」

まだ子供であった男は後から入ってきた武装した男に抱き上げられ、外へと連れ出された。
女性は大丈夫だと微笑んだ。帰してあげることはできないけれど、この方がちゃんといい暮らしができるように計らってくれるから、と。
何の話なのか分からなかった。泣きたいのに混乱しすぎて涙も出てこなかった。でも分かったことがひとつ。帰れない。

ハンバーグはもう食べれないし、母親にも会えない。父親にだって会えない。祖父にも祖母にも会えなくて、友達とももう遊べない。

いやだ、と思った。

帰りたい、と思った。

思えば涙が溢れて、離してと、帰りたいと、母親と父親を呼びながら泣いて暴れて。そうして黙らせろという声を耳にした後、気がつけば草の上に倒れていた。

目の前には分厚いドア。後ろには暗い暗い森。獣の声に体を震わせ、けたたましい鳥の声に耳を塞いだ。

怖かった。怖くて怖くて、どうしてこんなことになったのか分からなくて。でも確かなことは石畳の上で見たあの二人。あの二人が自分をこんなところに連れてきたのだということ。

あの二人。

「巫女と宰相。代替わりしてもなお同じことを繰り返すって？」

今度は本物だったようだけれど、本物を呼べるまでに男と同じような犠牲者がいないとは限らない。いたのだとすれば、ああ、一体どんな人間が日常を奪われたのだろう。

男は勇者の召喚の儀式において呼ばれた。呼ばれたが人間違いだった。彼らは勇者ではない人間を呼んでしまった。そして捨てた。

巫女が男に言った言葉は偽りか、それとも本当にそう思っていたの

か。そんなことは知らないが、男は城の裏に捨てられた。

ドアは厚くて開かない。人はどこにもいない。行ける場所は目の前に広がる暗くて不気味な森だけ。

それでもお腹がすいて死にそうで、思考が全く働かなくなった男はふらふらと歩いて森へと向かった。そこで会った盗賊を稼業にする男に拾われて、生きるために何かを盗んで誰かを殺した。

そんな生き方をする自分を誇りはしないが、厭ってもいない。そうしなければ死んでいた。そうしなければ生きていけなかった。

「さてさて、本物を無事呼べておめでとう？」

酒の入った杯を掲げる。

父親が、母親が成し得なかった勇者召喚。巫女も宰相もさぞかし誇らしいだろう。

ぐっと酒を飲み干す。

召喚された勇者はこれから魔王退治だ。円も縁もないこの国を救うために魔王をその配下を殺して殺して殺して。男とは違う、正義の名の下に殺していくのだ。

「くっ」

くっくっくっく、と笑う。

ああ、愉しい。愉しい、愉しい、愉しい。結局は殺すのだ。失敗だと放り出された男と同じように、望まれた勇者も殺すのだ。そんな世界、呼ばれなければ知りもしなかったのに。

ああ、そう考えれば勇者も犠牲者なのか。この国の。召喚させた宰相の。召喚した巫女の。

「まあ、今はせいぜい喜んでればいいさ」

いつかお前達が生み出した業はお前達に帰るさ。

脳裏に浮かぶのは男を召喚した先の巫女と先の宰相。

今も生きているあの二人。いつか殺してやると思っていた二人。

男は立ち上がり、城を見上げて口元を上げた。

『おかあさん…っ、おとうさ…ぁっ』

かつて泣いた子供はあっはっはっはと笑って城に背を向けた。

短編６（短編４と同設定。望んだ人達）

石畳の上、光が生まれる。それは三年前にも一度見た光景だった。
今度こそ。
ぎゅっと胸の前で手を組んでその光を見守る。
三年前は失敗した勇者の召喚。ようやく準備が整って今度こそは失敗しないようにと再度行って。
今度こそ。今度こそ。どうかお願い。

その必死の願いが届いたのか、光が弾けた後に現われた一人の少年。
呆然とした顔がこちらを見て、そして宰相を見た。だれ、呟かれた声に宰相が前に出て膝をついた。

「お待ち申し上げておりました、勇者様」

ああ、今度は成功した。
一番に伝えたい人はもういない。知らない間に神殿をやめて姿を消してしまった。
だから勇者様を召喚することができましたと、喜んでくださいますかと祈るように目を閉じた。

好きな人がいた。
神殿の人間ではない。神殿に雇われていた傭兵だった。
傭兵とは思えない痩身で、けれど他の傭兵達と引けを取らない腕を持っているのだと聞いた。

彼とは外出する際の護衛として何度か会い、話をすることもあったけれど、彼はあまり表情を変えることがなかった。いつでも一線置いて、必要以上に口を開こうとしなかった。こちらがどれほど意識しても、彼は全くと言っていいほど意識をしてくれなかった。

仕方がない。巫女を恋愛対象として見るものはいない。
神殿に使える巫女。神に一番近いとされる巫女。その巫女は巫女であって、一人の女性ではない。そう思われているのだから。

分かっていてももどかしかった。いつかこちらを見てくれないだろうかと。異性として意識してくれないだろうかと。いつだってそう思っていた。巫女にも恋愛は許されているし、結婚だって許されているのだ。想い続けていれば、接し続けていればいつかは必ず、とそう願っていた。

その彼が姿を消したのは三年前。
彼は神殿と交わしていた契約を破棄し、神殿を去っていった。
神殿と契約を交わした傭兵には高額の給金が支払われる。そのため契約を破棄する傭兵は少ない。だからまさか彼が契約を破棄するとは思っていなかった。ずっとずっと神殿の傭兵でいるのだと信じて

疑っていなかった。

何故。どうして。

誰もその答えを知らなかった。神殿に使える神官も侍女も傭兵中間も誰も。

そもそも傭兵である彼らは仕事上のつきあいはしても、個人的なつきあいはしないものらしい。

傭兵は雇われる相手によっては、いつどこで敵同士となるかも知れない相手に、己の情報を安易に与えることはしない。

今が同じ神殿に雇われているからといっても、いつ相手が契約を破棄して他の雇い主につくかもしれない。その相手が己の雇い主に敵対しないとも限らない。その時に己の情報を持っている相手がそれを攻撃材料に使うかもしれない。

だから誰も彼が契約を破棄した理由を知らなかった。

ああ、彼は一体どこに行ってしまったのだろう。まだこの街にいるだろうか。この国にいるだろうか。

勇者の召喚に成功して、そうして勇者が魔王退治の旅に出た今もずっとそれを思っている。

魔王が倒された。

その報を宰相は待ち望んでいた。そして望んだ言葉を聞くや否や微笑んだ。

ああ、ようやく。
宰相と巫女が召喚した勇者がやってくれた。この国を救ってくれた。
父が成し得なかったことを、先の巫女が成し得なかったことを私達が。

国中が湧き上がる。
誰もが勇者を称える。魔王を倒し、国に平穏を取り戻してくれたと称える。

勇者を召喚しようと言ったのは宰相。
まだ宰相であった頃、父親が当時の巫女と共に召喚に失敗して失敗して失敗して。そうしてとうとう成し遂げられずにいた勇者召喚。
それをしようと巫女に持ちかけた。巫女も頷いた。国のために勇者が必要だから。

一度目は失敗した。ただの少女だった。
悔しくはあったけれど、父親と先の巫女も何度も失敗したのだ。一度で成功するとは限らない。
だから諦めず再度召喚した。立て続けに召喚は巫女の体力や、準備の都合上できない。そのうえ二人揃って空いた時間がなかなか取れずにいたせいで三年の年月を要したけれど。

そうして二度目の召喚で現われたのは、確かに勇者だと分かる力に満ち溢れた少年。
覚えた歓喜は今もこの胸にある。

その少年が、勇者が帰ってくる。もうすぐ、もうすぐ。

国の願いを聞き入れてくれた勇者が、誰もが待ち望んだ平穏を連れて戻ってくる。

集まる広間で巫女と目が合った。涙を流して喜んでいる巫女。あの方が成し遂げてくださいましたと。
それに頷いて。微笑んで。

素晴らしい。素晴らしい。ああ、何て素晴らしい。

勇者の帰還に湧き上げる広間で。
宰相も巫女も知らずに笑う。

夫の腕の中、騒ぎを耳に怯えて震える少女がいることも。
仲間達の輪の中、嘲笑を浮かべて騒ぎを聞く男がいることも。

知らずに、笑う。

短編7（年下×年上・別れた後）

別れようと言われた。
もう無理だと言われた。
君も分かっているでしょう、と言われた。

嫌だと言わなかった。
まだ大丈夫だと言わなかった。
分かりませんと言わなかった。

言わなかった。

年の差というものは思いの外大きかったのだろう。
同じ年の恋人を腕に纏わりつかせながら思う。
ひとつやふたつではなかった。前の恋人との年の差は親子とまではいかなくとも、近いものはあった。
あの人が僕を受け入れてくるまで時間はかかったし、受け入れてくれてからもあの人は関係を隠したがった。

分かっていた。
あの人は自分が年上であることを気にしていた。僕が年下であるこ

とではなく、自分が年上であることをだ。
そんなものはどうにもならない。僕がそんなものどうでもいいと撥ね退けて手に入れた恋人だ。気にする必要なんて露ほどもなかった。けれどそうできないのがあの人だった。

意味がなかった。
恋人である意味がなかった。
あの人は隠したがる。公にすることを嫌がる。それでは何も意味がない。

僕に群がる女は相変わらずで。
あの人に近づく男だって消えない。
僕はあの人以外の女なんてどうだってよかったけれど、あの人に近づく男はどうだっていいわけではなかった。
別に恋愛感情から近づいているわけではないと分かっていても。欲望なんてものを抱いて近づいているわけではないと分かっていても。
嫌だった。嫌だった。嫌だった。
僕のものだと言えないのが嫌だった。僕のものだと叫びたかった。
どうしてそれを許してくれないのだと責めたかった。

きっと疲れたのだ。
それに疲れた。
愛しているのに、愛されているのに煩わしい現状は何ひとつ変わらない。
膨張する不安。嫉妬。それを霧散させるための術さえ手に入れられなくて。

別れようと言われて、ぴしっと何かが罅割れた音がした。
もう無理だと言われて、ああ、確かにと思った。
君も分かっているでしょうと言われて、あなたは分かっていないで

しょうと嗤いたくなった。

疲れた。
疲れた。
もう、疲れた。

だから何も言わなかったのだ。
だからあの人を忘れようと思ったのだ。
だから新しい恋人を側に置いたのだ。

腕に纏わりつく柔らかい感触が気持ち悪いのに。
耳に吹き込まれる高い声が鬱陶しいのに。
唇が紡ぐ僕の名が忌々しいのに。

分かっていなかったのは、僕も同じなのだと気づかなかった。

「だ、れ」

足が止まる。
視線が固定される。
知らず紡いだ言葉に、恋人が耳聡く聞き返す声も聞こえずに。

喫茶店の窓際に座って微笑むあの人を見た。
スーツを着た男と向かい合って微笑みあうあの人を見た。

だれ。
だれ。
あのおとこはだれ。

柔らかく笑う。
はにかむように笑う。
僕に見せた笑みを他の男に見せる。
僕には許さなかった公の場で、他の男には許した公の場で。

年の差は思いの外大きかった。
あの人にとってはとてもとても大きかった。僕にとっては取るに足りないものだった。

違う。
違う違う。
違う違う違う！！

僕があなたと同じ年ならよかった！
あなたが僕と同じ年ならよかった！
そうしたら周りの目なんて気にしなかったのでしょう？あなたは！
そうしたら別れなんて切り出さなかったのでしょう？あなたは！

もっと似合いの子がいるはずだと。
同じくらいの年の子で、綺麗な子、可愛い子がいるはずだと。
そんな馬鹿なことを言い出さなかったのでしょう？僕があなたと年が離れていなければ！！

そうしたら僕だって嫉妬しなかったんだ。あなたと似合いの年の男があなたに近づくそのことに！大学生の僕と違って働く男があなたと仕事をする。たったそれだけのことに嫉妬したりしなかったんだ！あなたと年が離れてさえいなければ！！

年の差なんて気にしてもどうしようもなかった。だってどうにもできないことだ。僕はあなたより後に生まれて、あなたは僕より先に生まれた。その事実は変えようがないのだから。
気にしても仕方がない。だから気にしてない。どうでもいいことだ。
僕はそんなふうに言い聞かせて。あなたは言い聞かせなかった。

だから擦れ違ったのか。
あなたと話せばよかったのか。
年の差を互いが気にしていたのならば。
僕も年の差を気にしているのだと気づいてさえいれば。

もう遅いのに。
もうあなたはこの腕の中にいないのに。
もうあなたは僕じゃない男に笑いかけているのに。

笑う姿を目に、呼ぶ声なんて聞こえずに。
手放してしまったあなたを、ああ、今もまだ愛しているのだと気づいて。同時にあなたはそうではないのだと気づいて。

ああ。
ああ。
ああ。

ぴしりと罅割れたままだった何かが、堤防が決壊したような大きな音を立てたのを頭の片隅で聞いた。

短編7（年下×年上・別れた後）（後書き）

元恋人を監禁する年下の青年の話が浮かんだので、それに向けて書いてました。
が、ひと段落したら続きが書けなくなりました（汗）
なので別れてから監禁しようと思い立つ前までの話です。

短編８（微ＧＬ＋ＮＬ・三角関係）（前書き）

大したことはありませんが、ガールズラブ表現があります。
苦手な方は回れ右をお願いします。

短編８（微ＧＬ＋ＮＬ・三角関係）

私は君にとってただの宿り木でしかない。
それでよかった。それがよかった。それでも、よかった。

女の子らしい君。私と違って可愛い可愛い女の子。
だから好きになったのだろうか。私が憧れるものを持つ君を。私が持たないものを持つ君を。
けれどどうしてそれが恋情へと変化したのだろうか。私は決して同性愛者というわけではないのに。
知らない。分からない。それでも好きだという想いは確か。

「好きな人ができたの」

君は言う。
一体何度目だろうか。君は誰かに恋をして、誰かと想いを通わせて、そうして別れてまた別の恋をする。
私はそれを見守る。君が頬を染めるところを。君が幸福に笑うところを。君が痛みに泣くところを。
一番側で、君を応援して、祝福して、慰める。

「彼とつきあうことになったの」

何度目だろう。
何度も、何度も、何度も。

君は知らない。私の想いを。君は知らない。だから君は私の側にいて、私に縋りつく。
それがどれほどの幸福か。どれほどの痛みか。
君は知らない。知らない。知らない。知らなくていい。

「彼と別れたの」

何度も同じ言葉を繰り返し聞いて。
何度も同じ言葉を繰り返して。

君は恋をしている間は私を省みることはなくて。
君は恋に破れれば私の元へと戻ってきて。

それに私は何をしているのだろうか、と思って。
それに君は私に何を求めているのだろうか、と思って。
それでも私は君を受け入れて。君が戻ってくるその時を、待って。

「どうして！どうしてあなたなの！どうして…！！」

泣いている。
怒っている。

君はまた新しい恋をしたのに。
新しい恋を追いかけているのに。
なのに君は私のところにやってきて、目を真っ赤にして、涙をぼろぼろと零して私を詰る。

「私の方があの人のこと、好きなのに…！！」

君が新しく恋をした男はひとつ年上で。今まで君が恋をしている間、行く温室で私が出会った先輩で。ほんの一時、同じ時間を過ごすだけの間柄で。
特別な想いなど持ってはいなかった。居心地がいいとは感じていたけれど、君に抱くような想いを抱いたことなどなくて。
なのに不意に途切れた会話。逸らせない視線。気がつけば唇が触れ合っていて。

君がそこにいたなんて気づきもしないで。
君が彼に恋していたなんて知りもしないで。
君が好きだよ、と囁かれた言葉に戸惑って。
ゆっくり考えて、と優しく撫でられた頭をその胸に預けて。
そっと目を閉じて、彼のことを考えていた。

君が好きだ。君が好きだ。
君に詰られて胸が痛かった。
なのに彼を私にちょうだい。そう言われて何も言えなかった。
彼はものではないのだと。私は彼に恋情は抱いていないのだと。君が彼を好きだというのならば応援するのだと。そんな言葉が頭に浮かぶこともなくて。
ただただ君を見ていた。何も答えない私を君が刺すように睨みつけて、許さないからと叫んで走り去って行っても、私は引き留める言葉もなく、ただ君を見ていた。

分からない。
分からない。
分からない。

君が彼に恋を仕掛ける。
振り向いてと切実な想いを込めて。
私はそれを遠くで見ていて。
けれど今までと同じように温室に行って、今までと同じように彼と同じ時間を過ごす。
それは可笑しなことではないだろうか。頭の中でそう問いかける。可笑しいだろう？だって君が好きなのは彼だ。私が今会っている彼だ。今までと同じであるはずがないのに、今までと同じだなんて可笑しいだろう。

彼は私を見る。
優しく頭を撫でる。
好きだよと囁く。

私は。
私、は？
抱き寄せられる頭をそのままに目を閉じる私は、一体何を考えているのだろうか。

君が私に言った。
久しぶりに笑って言った。
「好きな人ができたの」
君は新しい恋を追いかける。
「あの人とつきあうことになったの」
君は新しい恋を実らせ、幸福に笑う。

私はいつものように温室に行って。いつものように彼と同じ時間を過ごして。
彼は私に好きだよと囁いて。私は絡まる感情に身動きができなくなって。

君が好きだ。
でも彼との恋を私は応援できなかった。彼以外の男との恋は応援できたのに。
君が好きだ。
でも君が彼を振り向かせようと必死だった間、私は何もしなかった。
温室で会う彼に君の話を持ち出すこともしなかった。
君が好きだ。好きだ。好きだ。
でも君が彼ではない他の男を好きになったのだと笑って報告した時、
胸の奥で渦巻いた感情は複雑に絡まりあっていて。

彼を好きだと言っただろう？
私に彼がほしいのだと言っただろう？
私に彼をくれないのならと絶交を言い渡しただろう？
なのに君はもう別の男に恋をしたと言うの？

私は君に何も言えなかった。
私は君を応援できなかった。
私は彼に会い続けた。
私は彼の想いを聞き続けた。
私は何を考えて、何を思って、何を、何を、何を。

それら全てが絡まって絡まってぐちゃぐちゃになって。
どこかに安堵、なんて感情も混ざり合って。

「好きだよ」

彼に抱きしめられて。名前を呼ばれて。
涙が零れた。

好きだ。好きだ。好きだ。
恋情を君に抱いている。抱いて、いた？
分からない。分からない。分からない。
私は今まで君の宿り木だった。恋を知って飛び立つ君が恋に破れて
休みにくる宿り木だった。
それでよかった。それがよかった。それでも、よかった。
私の君への恋は実らない。分かっていた。知っていた。だから君が
必ず休みにくるこの立場が愛しかった。

私は今、また君の宿り木になった。
今の恋に破れれば君はまた休みにやってくるのだろう。
けれど、けれど、でも。

「私、は」

下りてくる唇を、目を閉じて受け止める私は。
抱きしめてくる腕を感じながら、その背を抱き返す私は。

今までのように君だけを愛しいと。
今までのようにそんな君に優しいだけの気持ちで、傷ついたその心を抱きしめてあげることができるのだろうか。

短編9（双子・妹→兄）（前書き）

シスコン、ブラコンな話ではありません。
どっちかっていうと近親相姦寄りです。ご注意ください。

短編９（双子・妹→兄）

許せない。
許したくなんて、ない。

愛する双子の兄。
生まれる前から一緒だった双子の兄。

いつだって一緒だった。
どこにいくのだって一緒だった。
何をするのだって。

でも、気づいてしまった。
私は私。あなたはあなた。決して同じじゃない。ひとつの命じゃない。

一緒に同じことをしていたのに、いつしか一緒に同じことができなくなった。
私にはできないのに、あなたにはできた。
あなたにはできないのに、私にはできた。

あなたは笑う。無邪気に凄いと笑う。
私は笑えない。無邪気に凄いなんて笑えない。

あなたが誰よりも大切で。
あなたを誰よりも愛していて。
あなたを誰よりも憎んだ。

世界に私とあなた、たった二人ならよかったのに。
世界に私とあなた、たった二人なら。

あなたは世界を広げる。
私の世界はあなただけ。

あなたはどんどん私から離れていく。
大切な妹だと笑うくせに。
大切な半身だと笑うくせに。

あなたは私を見なくなる。
あなたは私を想わなくなる。

許せない。
許したくなんて、ない。

あなたじゃない人の腕の中で笑う。
あなたじゃない人の口づけに酔う。
あなたじゃない人のぬくもりに溺れて。

そのたびにあなたは私を見る。

男を渡り歩く私に、自分を大切にしろと憤る。
憤って、哀しんで。けれど見える奥底の感情。

もっと、もっと憤ればいい。
もっと、もっと憤ればいい。

大切な双子の兄。
愛しい愛しい双子の兄。

世界を広げて、たくさんの人を心に住まわせて。
けれど、ねえ。ねえ、兄さん？
はやく、はやくはやく、

あなたの目に宿る憎悪の刃が、私を抱く男に突き刺さっていることに気づいてしまえばいいのに。

短編１０（異世界・叶わない片想い）

これほどに愛しいと思った女はいなかった。
これほどに欲しいと願ったことはなかった。

愛していると。
愛してほしいと。
切実に切実に願った相手。
それが決して叶わぬ想いなのだと思い知らされて。
この身を襲ったのは絶望だった。血を吐くほどの罪悪感だった。

彼女は決して想いには応えてはくれない。くれるはずがないのだ。
どこの世界に自分を殺した相手を好きになどなる？自分を嵌めて殺した相手を好きになど、一体どこの誰がなるというのだ！

前世の記憶。
それを持つものが存在することは知っていた。
けれどそれはほんの一握りで。そしてそれは神に仕える者に集中していて。
だから思いもしなかった。彼女は神に仕えるものとは対極に位置する存在だったから。
神に力を借りて奇跡をなすのではなく、世界に流れる神の力を己の力に変換し魔法を作り出す、世に言う魔女だったから。

彼女は叫んだ。
ずっとずっと拒み続けていた彼女は、今まで言わずにいた言葉を叫んだ。

「何が愛だ！お前は私を殺したくせに！お前の姉が恋した相手が私の姉の恋人だったから！お前の父は私の父に濡れ衣を着せて殺して！お前の兄は私の姉が邪魔だと殺して！お前は世間の冷たい視線の中、絶望と共に生きるよりマシだろうなどと冷たく笑って私をその剣で貫いたくせに！！」

心臓が凍った。
彼女の憎しみの目に、傷ついた目に、溢れる涙に。ごく一部の人間しかしらない真実を語る声に。

思わず覚えのある名を震える声で紡げば、彼女は齢十三とは思えない笑みを浮かべた。口元を上げて、歪んだ笑みを浮かべて、覚えていたのか、と。名前など覚える価値もないと捨て置く男だと思っていたと。
今度は彼女の名を紡ごうと口を開けて、けれど呼べなかった。声を失ったかのように、何の言葉も喉から出てくることはなかった。

覚えている。
父様、と捕縛され、連れて行かれる父親に向かって手を伸ばしていた姿を。
姉様、と切り殺された姉に縋りついて泣く姿を。
そして絶望に浸された目がこちらの姿を、冷たく笑う姿を映していた姿を。
覚えて、いる。

忘れていたけれど。
ずっとずっと忘れていたけれど。

あの日に戻ったかのように脳が再現を始めた。

私を殺すか、あの時のように。
彼女が言う。
殺す？ああ、そうか。彼女は生き証人だ。誰にも知られてはいけない真実を知る人物だ。
けれど手は動かなかった。殺す？彼女を？殺せるはずが、ない。

愛している。
愛しているのだ。
愛して、

「信じるものか。お前など、信じられるものか！」

それは当然の言葉だ。
彼女を、彼女の前世である少女を利用した。
彼女の父親を嵌めるために。それだけの情報を集めるために彼女に近づいて、彼女に偽りの愛を語って。そうして裏切った。

これほどに愛しいと思った女はいなかった。
これほどに欲しいと願ったことはなかった。

愛していると。
愛してほしいと。
切実に切実に願った相手。
初めての、相手。

決して愛されることはない。
彼女の魂には記憶がある。前世の記憶が。父を、姉を殺された記憶が。この手がその生を奪った記憶が。
憎まれて憎まれて。そうされる以外に何がある？

二度と顔を見せるな。

彼女は涙を流して言う。
憎しみを目に宿して。
悲しみを目に宿して。
傷ついた目をそれらに隠して。

お前の言う愛など、信じられるものか。

それはどうあっても覆せはしない、己の罪の証。

短編１０（異世界・叶わない片想い）（後書き）

実は両想い。でも叶わない話。

短編１１（異世界・精霊×巻き込まれた勇者の友人）

困ったことになったなあ、と思う。
下校途中で足元が光って、気がついたら見知らぬ世界でいらっしゃいませ、勇者様、だ。友人が。
どうやら召喚陣が一文字間違っていたとかで、関係のない私まで一緒に呼んでしまったらしい。
大変申し訳ありませんと言われたけど、あれ口先だけだ。面倒だなって顔が一瞬見えた。子供だと思ってこのやろう。
でもそんなことに気づかない無駄に正義感が強い友人は、魔王に侵略されつつあるこの国を救うため、勇者の肩書を受け入れて、魔王討伐の旅に出た。私を連れて。

正直嫌だったけど、でも残される方も嫌だった。感じ悪いもん。この人って。いや、それとも大人ってそういうもんなわけ？子供が思ってるより大人じゃないってこと？
人の友人を自分勝手に召喚して、全然知らない国のために命かけろって言って。そのくせそっちで間違えて召喚した私を何こいつみたいな目で見るんだもん。人間性疑うよね。
なので一緒に旅に出て、こっちもこっちで厄介。そう思った。

「これって魔王討伐の旅だよねえ。恋シュミだっけ？」
「れんしゅみ？」
「あー…、恋愛シュミレーション。意中の相手を落とすゲーム？」
「ああ」

呆れたように座り込んで目の前の光景を見てる私の隣に立つ男、勇者だけが持てるっていう聖剣を守ってた精霊が頷いた。

この精霊は謎だ。聖剣を受け取りにきた友人を聖剣の主と認めて、そして一緒に旅についてきた。
普通に考えたらこの精霊も友人を守るためについてきたんだって思うはずだ。現に友人も一緒に旅をしてる男達もそう思ってる。
なのにこの精霊は何故か私の隣にいる。私を守ることが友人の安心にも繋がるからだって言うけど、可笑しい。精霊は友人に興味を持っていないように見えるから。

「で、誰が一番の有望株だと？」
「えー？」

剣術も魔法も最高レベルのオールマイティなさわやかな王子様。
癖の強い、でも王子様でさえ使えない古代魔法を使う魔法使い。
情報収集能力に長けた普段は寡黙な剣士。

「今のところは王子様かなあ。王子様が守ってくれるっていうの、女の子は夢見るでしょう」
「お前も？」
「んーん。私は興味ない」
「ふん？」

でも、と思う。
もしかしたらこの私の隣に立つ精霊こそがダークホースかもしれないと。
我先にと友人を守ろうとする男達。好かれようとする男達。その中でこの精霊だけが動かない。今の状況に友人が慣れてきたころ、その姿は目立つだろう。自然と目が追うようになるだろう。
友人を守るために存在するはずの精霊。けれど精霊は友人ではなく私を守る。友人の安心のために。
それらはアプローチをかけてくる男達より、きっとずっとずっと友

人の心を占める。

ちらりと見上げると視線が合う。どうした？と目が微笑むのに心臓が音を立てる。
表情筋が死んでいるのかと思うくらい表情が動かないこの精霊が時々見せる表情の動き。これはやばい。
何でもない。そう言って、また目の前の光景を眺める。

男三人に囲まれて楽しそうに笑う友人。
口喧嘩が始まれば困った顔をして。
ころころ、ころころ、表情が変わっていく。

「今日は野宿かなあ」
「大丈夫だろう。あれらが勇者を野宿させるとは思えん」
「そっか。だよねー」

ああ、なら今日もお布団で熟睡だ。
その時は、とまた隣の精霊を見上げる。
何故かこの精霊は夜も離れない。宿をとる前に友人達の前で消えてみせるくせに、私が与えられた部屋に入れば姿を現わす。
…抱きしめられて寝ることに慣れてきたのは問題だと思う。
でもぐっすり寝れるんだよ、これが。疲れですぐに眠りにつくことはできるけど、夢見は悪い。なのにこの精霊に抱きしめられて眠ると夢も見ない。見ても悪い夢じゃない。癖になりそうだ…。若干なってるけども。

本当、どういうつもりなのか分からない。何がしたいのかねえ？
小首を傾げると、精霊が何故か目を見開いて右手で口を覆った。お？と思う私の前で顔をそむけて、何やらぶつぶつ言ってる。なんだ？聞こえた言葉は反則。何が反則？上目遣いってした記憶ないよ？

そんな私は知らない。
友人が聖剣を受け取りにきたその時、精霊が友人ではなく後ろにいた私に目を奪われていたなんてことは、全然全く知らないでいた。

勇者が召喚された。
相変わらず他力本願な国だな、と思いながら欠伸をした。
まあ仕方がない。そうさせたのはこの国に召喚術を伝え、聖剣を与えた精霊王達だ。
世界が魔王によって脅かされる。それは等しく精霊の住みやすい環境が汚染されるということでもあった。だから精霊の頂点に立つ精霊王達が人間にそれを打開する術を与えた。だから仕方がないのだ。人間というものは一度楽を知れば知らなかった頃には戻りたがらないものだ。だから魔王相手に早々に匙を投げて勇者を頼るのだ。そしてこれもまた仕方のないことなのだ。

まあ、それはともかくだ。これで一応俺の役目は終わる。聖剣を勇者に渡せば自由だ。魔王討伐がなされた後は、俺ではない別の精霊が聖剣を守る任につくだろう。ようやく解放される。
そう思っていた。勇者に会うまでは。

「う～…ぬくい」

腕の中で少女がすりよってくる。呟く言葉は寝ているから寝言か。
くすりと笑ってその柔らかい体を抱く腕の力を少し強める。

今代の勇者は年端もいかない少女だった。
おいおい、と思いはしたが、内に秘める力の大きさに、精神面を支えられる人間がいさえすれば大丈夫か、と思い直して、視線が止まった。
勇者の後ろについてきた人間のうちの一人。勇者と同じくらいの年の少女。目立つ特徴があるわけでもない、きっとすれ違っても記憶には残らないだろう、どこにでもいる少女。なのに目を奪われた。
勇者に聖剣を渡すための試練を与える間もずっと意識は少女から離れなくて。聖剣が無事勇者の手に渡った時、気がつけばついていくと言っていた。

「…ん」

胸に顔をうずめて眠る少女。
勇者の友人。勇者が一番子供らしい顔を見せる相手。
旅の同行者は少女に対して興味はないらしい。勇者に夢中だ。その延長で少女にも気を遣う。そこには人間としての当たり前の情と、勇者に振り向いてもらうために友人である少女を利用しようという打算があって。少女もそれに気づいているから当たり障りない関係を彼らと築いている。
それを腹立たしくは思わない。彼らは少女に興味がない。少女も彼らに興味がない。少女の側にいるのは俺だけだ。

抱きしめる。髪に顔をうずめる。
気持ちいい。

初めは警戒していた少女も、悪夢を見た夜、起こして抱きしめて宥めたこの腕が悪夢を運ばないと知ってからは無防備だ。同じ寝台に潜り込もうと、この腕を広げようと警戒しない。
何のつもりだろうとは疑ってはいるようだけれど、男としての警戒

はされていない。複雑な心境ではあるものの、美味しい状況だ。逃すつもりはさらさらない。

側にいて言葉を交わす。
そのたびに知る少女のこと。
そのたびに愛しいと思う感情は育つ。

困ったな、と思う。
昼に少女が呟いた困ったな、とは違う困った。

この少女がほしい。

巻き込まれただけの少女なのに。
本当ならこの世界とは欠片ほどの縁もなかったはずの少女なのに。

元の世界に還るというのならば、一緒についていきたいと思うほどに愛しいと心が叫ぶ。

短編１２（ＧＬ・輪廻転生・片想い）（前書き）

大したことはありませんが、ガールズラブの話です。
苦手な方は回れ右をお願いします。

短編１２（ＧＬ・輪廻転生・片想い）

輪廻転生。
これほど素晴らしく、同時に残酷なものはない。
そう、思う。

風に流れる長い黒髪を押さえた巫女装束に身を包んだ少女はくすりと笑う。
背後には赤い鳥居。鏡神社がある。そこの巫女である少女はもう何年も、何十年も、時を数えるのを忘れるほどにそこに在る。その存在が、ではなく、その魂が。

「幾度輪廻を繰り返しても、私は私。あなたはあなた。なのに私は変わらず、あなたは変わる。不変と可変は交わることがないのかしら。…ないのね、きっと」

「雲雀」

呼ぶ神官装束の青年に振り返って、けれどもう一度長い階段の下を見る。
通り過ぎるのは近隣の高校生。仲のいい男女。
それを眺めていると、隣に気配。けれどそちらは見ない。

「ばか」
「そうね」

呆れたような声に笑う。
眼下にはもう誰もいない。隣に立つ青年が雲雀の頭を撫でた。
雲雀は目を伏せて、大丈夫、と言葉を紡いで目を開けて…不思議そ

うに首を傾げた。

「雲雀？」

「何か光った…」

「光った？」

とんとん、と軽やかに下りていく雲雀に首を傾げながら青年は後に続く。

歩いて下りていく青年より駆け降りる雲雀の方が早いのは当然で、雲雀は青年が階段の中段に差しかかる頃には下まで降りていた。そしてしゃがみ込むと、何かを拾い上げる。

「鍵？」

鍵の穴に通された鎖は輪になっていない。なるほど、切れたのだろう。そして繋いでいたものから落ちた。

落ちてくる髪を片手で押さえながら、どこの鍵かしら、と裏向ける。その行動に特に意味はない。

「雲雀、何かあったのか？」

階段を下りながら声をかけてくる男に、ええ、と鍵を見せようと振り仰ごうとして、止まる。

視線の先は先程、男女が向かった先。その片割れの少女が焦った様子で何かを探すようにきょろきょろしながら走っている。その顔は泣きそうだ。

どうしたのだろう。雲雀が立ち上がると、気づいた少女が雲雀を見て足を止めた。

目が合う。

それに込み上げた想いに雲雀は泣きそうになって。けれど軽く頭を振って何でもないように少女に微笑みかける。

「もしかして、これ、あなたの？」
「…え？…、あ、あ！はい！」
家の鍵！と少女が涙を溜めて雲雀の元へ走ってくる。
はい、と差し出された鍵を大事そうに両手で受け取って、ありがとうございます！と何度も頭を下げる。
「これないと家入れないところでした！」
「いいえ。鞄にでも繋いでいたの？」
こくん、と少女が頷いた。
「今度から鞄の中にしまっておいた方がいいわ。また失くすといけないから」
こくん、と少女がまた頷いた。
そして慌てた様子で鞄を開けて、無造作に突っ込もうとするのに雲雀はきょとん、として、待って、とその手に触れて止める。それでは今度はどこに入れたのか分からなくなって困るだろうに。
不思議そうに首を傾げた少女の前で雲雀は帯の隙間に入れてあった香り袋を取り出すと、その口を開いて少し貸してね、と鍵を受け取る。そして香り袋の中に入れると、きゅっと口を閉める。
「はい、あげるわ」
「え、え？」
「どうぞ」
少女の手を取ってそこに香り袋を乗せて、そっと指を折らせる。そして迷惑でなければもらって？と微笑みかければ、少女がぼんっと顔を赤くさせて、迷惑だなんてそんな…！と首を横に振る。
そして大切そうに握った手を胸元に引き寄せると、いいんですか？と上目遣い。それにええ、と笑って。

「ありがとうございます！」

花が咲き綻ぶような笑顔を向けられて大きく目を見開いた。
胸の鼓動がどくんっと大きな音を立てた。

ああ、だめ。

抑えたはずの想いが再び込み上げる。
泣きたい。泣いてしまいたい。けれどだめだ。泣いてはだめだ。目の前の少女には訳が分からないだろう。
ぐっと胸元を握る。泣くな。泣くな、泣くな。呪文のように胸の内で唱えながら、何とか少女に笑顔を返そうとしてぎこちなくなる。
涙が、溢れそうだ。少女に手を伸ばして、抱きしめて、叫びたい。
その想いが止められなくなりそうになった、その時。

「雲雀」

はっと顔を声の方へと向ける。
最後の一段、そこに立つ青年の姿を認め、雲雀はほっと息を吐く。

「神主様がお呼びだぞ」
「おじい様が？わかったわ、ありがとう」
嘘だ。青年は雲雀と一緒にいたのだ。階段を下りる雲雀の後に続いていたのだ。神主が青年と話す時間などない。けれど雲雀はそれに乗る。雲雀のための嘘だ。今はとてもありがたかった。
「それじゃあ、もう落とさないようにね」
「あ、はい」

少女に今度は自然に笑いかけて、青年の側に戻る。
青年が雲雀の頭を撫でるように手を置く。そして雲雀の手を掴んで、下りてきた階段を上る。

雲雀の手が小さく震えている。
それを感じた青年は掴んだ手をぎゅっと強く握って、泣きたいのを我慢しているだろう雲雀のために少し早足で階段を上って。もう少し我慢しろ、と心で囁いて。
この階段を上りきれば。境内まで行けば。もっと我慢できるのなら雲雀の部屋まで戻って。そうしたならば思いっきり泣かせてやるから。全部全部聞いてやるから。

涙が雲雀の両頬を伝う。
流れて流れて、とうとう嗚咽さえ聞こえて。

もう少し。もう少し。

雲雀の手を引く青年は、どうしてこんなに階段が長いんだと悪態をつきながら。
輪廻転生なんてろくなものじゃない、と空を睨みつけた。

始まりがあった。
鏡を祀る神社に二人の巫女がいた。

いつだって二人一緒だった。
お互いが大好きで。お互いが一番で。お互いがいれば他に何もいらなかった。
それは何よりも強い想いで。
愛情という愛情全てをお互いに注ぎ合うもので。
それでも終わりがきた。

奪われた。
いつだって二人でいたのに。
片割れは権力者に見初められて、奪われた。
残された片割れは一人で神社を守って。守って。守って。
最後に片割れと交わした約束。それを胸に、ずっとずっとずっと。

必ずまたずっと一緒にいよう。交わした口づけは涙の味がした。

次の生で二人の巫女は再会した。
けれど片方は記憶を持たず、もう片方だけが記憶を持っていた。
それでもよかった。また一緒に。その約束は守られた。二人は一緒にいた。友人と呼んで、側にいた。
片割れが異性に恋をして、成就させて、家庭を持って、幸せに笑って。
それを側で笑って見守った。心は悲鳴を上げたけれど、己以外を選ぶ片割れに泣き叫びたかったけれど。それでも笑って見守った。

次の生でも再会した。今度は姉妹だった。
やはり片方は記憶を持たず、もう片方だけが記憶を持っていた。
それでもよかった。また一緒に。その約束は守られた。この先辛いことが待っていても、それでも一緒にいられることが幸せだった。
片割れが異性に恋をして、成就させて、家庭を持って、幸せに笑って。

それを側で笑って見守った。心は悲鳴を上げたけれど、己以外を選ぶ片割れに泣き叫びたかったけれど。それでも笑って見守った。

次の生でも、その次の生でも再会した。
どの生もやはり片方は記憶を持たず、もう片方だけが記憶を持っていた。
また一緒に。その約束はそのたびに守られたけれど、初めの時に交わした情は再び交わされることはなかった。

「雲雀」

青年の胸に縋って泣く。
今世での従兄妹である青年は、たった一人、雲雀が前世の記憶を持つことを知っていた。輪廻転生を繰り返して、そのたびに鏡神社の巫女として生まれてきたことを知っていた。それは片割れである巫女と出会うためだと。ここが巫女達の始まりの場所だからだと。

「雲雀」

今世で雲雀は片割れと出会おうとしなかった。
近隣の学校に通っていることを知っているのに。毎日神社の前を通ることを知っているのに。なのに雲雀は見ているだけだった。
それは片割れの隣に男がいたからだろうか。出会ってもまた、同じ結末を辿るのだと。それを笑って見守ることの辛さから逃げたのだろうか。

青年はそれならそれでよかった。雲雀を縛る片割れへの想い。それから解き放たれたいと雲雀が願うのならば、それでいいと思っていた。いっそ忘れてしまえばいいのに、とすら思っていた。
辛いばかりの想いなんて忘れてしまえばいいのだ。

雲雀がどれほど片割れを愛しているのかを知っているから雲雀には言わないけれど、できることならそうしてほしかった。雲雀に幸せになってほしかった。

泣く従兄妹を胸に抱いて。

今も雲雀を縛る雲雀の片割れに願う。

もう雲雀から手を放してくれと。

雲雀以外を選ぶのに、どうしていつまでも雲雀から手を放さないのだ。

雲雀を愛していたというのなら、雲雀をこれ以上苦しめるな。

強く強く雲雀を抱きしめながら、けれどと思う。

けれど、ああ、けれど。

もしも叶うならば、今世こそ雲雀の想いが成就しますように。

それもまた、本心だった。

短編１３（魔王な息子七歳×異世界人な養母二十五歳）（前書き）

七歳と言っても見かけ大きいです。ショタ描写はありません。

短編１３（魔王な息子七歳×異世界人な養母二十五歳）

「美咲、愛してる。一生大事にするから結婚して」
「…お母さんに愛の告白をするような子に育てた覚えはありません」

私こと佐藤美咲二十五歳は、十年前に異世界トリップなるものをしました。そこで出会った王子様、ではなく一人の女性。一人娘をよその国のお貴族様に奪われたと呪いの言葉を吐いていた女性。
ああ、ちくしょう。あの貴族のボンボンが。私の反対も押し切って攫うように一緒になったからには幸せにしないと一族郎党不幸にしてやる。
何が起こったの、ここどこ、な状態だった私の目の前でこれ。正直顔が引きつった。むちゃくちゃ怖かった。

そんな私に気づいたその人とまあ、うん、いろいろ話をすることになって、どうしてかその人に引き取られることになって。二人細々と暮らしてたら、たまたま城の下働きを募集してて、好奇心で二人応募してみたら見事に採用されて。おやまあラッキーな感じで働いて。

あれは忘れもしない。私が十八歳の頃だった。王妃様が子供を産んだ。双子だった。でもこの双子が問題だった。双子というより片割れが。
どうやら双子の片割れ、王族の子でありながら魔王の生まれ変わりだったらしい。魔力が半端ない。

助産婦さん？王妃様から子供を取り上げた人が人間には有り得ない濃密な魔力に気づいて、王様に言ったら即殺せって話になって。

いや、自分の子だろおい。そう愕然とした私と、ふざけんなてえめこの屑が、な顔をした母は、返して殺さないでと閉じ込められた部屋で泣き叫ぶ王妃様と共謀して、殺されようとしてるその子を攫って逃げた。

え、どうやって王妃様と共謀したか？私に聞かないで。母さんに聞いて。あの人怖いよ。どうやってあの隠し通路発見したの。王妃様を言いくるめたあの話術は何だ。

とにかく王妃様から逃亡資金と幾許かの宝石をもらって。逃亡ルートを考えて。そうして無事逃亡に成功した私と母さんは、俗にいう魔王の森で子育てを始めました。

……ええ、魔王の森。昔昔、世界を蹂躙せんとした魔王の居城があるとか言われてる森で。まあ、人っ子一人いなかったわけですが。っていうか、外から見たら暗いし不気味だしな森なのに、奥に行けば行くほど目も覚めるほど神秘的ってどういうこと。魔王の森だよね？精霊の森じゃないよね？

そういえば昔語りの魔王と勇者が戦ったのはこの森だけど、城とか出てこなかったな。だからあるらしいってだけで、ある、とは断言されてない。誰も奥まで行かないからね、怖すぎて。不気味すぎて。だから誰も魔王の森に生えてる木が瑞々しいとか、差し込む光が柔らかいとか、動物がいっぱい住んでるとか知らない。私達も見た瞬間思わず口を大きく開けて固まってたし。

そういうわけで、修復は必要だけど住めないわけでもない魔王城で意外と心身ともに安らかで穏やかな子育て生活が始められました。が、ここで母さんは言った。

「私、おばあちゃんって呼ばれたいわ」

は？と言った私を無視して、母さんは孫（決定）に笑いかけた。
私がおばあちゃんよー、この子はお母さん。よろしくねー。
…ちょっと待てや。
断固として拒否すると叫ぶ前に、母さんの孫（決定）は私をそのつぶらな瞳で見て、にぱあっと笑った。

……まあ、なんだ、うん。陥落した。
お母さんだよーなんて自分で言った。だって可愛かった。もうあの一瞬でメロメロになった。ちくしょう天使だ。あれマジで天使だ。

そんなわけで可愛い可愛いと育てつつ、時には心を鬼にしたりして育てて。お母さんだいすきーなんて言われながら、そのたびに鼻血出しそうなくらい頭をくらくらさせながら。
そうして時は流れて現在私二十五歳。すくすくと育った私の天使現在七歳はやっぱり魔王だったらしい。魔力を使って大人の姿に変身できるようになったらしい。いや、しなくていいでしょう。将来の私の楽しみにとっておいてよ。
元凶は母さんだ。女をものにするなら使い分けが必要よーとか言ったらしい。天使な笑顔でノックアウトさせて、男の色気で更に落とし込め。何を教えてるんだ。可愛い孫に何を！！そして何の話だ！！

そんな私をよそに母さんと私の天使は真剣な顔でああでもない、こうでもないと家族会議をすることが多くなった。私も入れてほしいんだけど。ほんのちょっぴり疎外感を味わいながら、ちょと拗ねたりしながら家族三人で幸せな日々を満喫して、何でだ。
あんまり長い間大人の姿を保ってられないらしくて、大きくなってちょっとしたら元の姿に戻ってた私の天使は、大人の姿で何故か私

の両手を握ってプロポーズをしてきた。
「今度はおばあちゃんに何言われたの」
「落とせ」
「何を？」
「美咲」

いや、もうメロメロだよ？赤ん坊の君が私に笑いかけた瞬間、メロメロになったよ？
っていうか、いつからだったっけ？お母さんって呼んでくれなくなったの。ちょっと寂しいんだけど。

「結婚してくれないなら婚約して」
「いやいやいや、何でそんな話に」
「僕が結婚できる年になったら結婚して」
「まてまてまて、お母さん話についてけてないから」
「じゃあ、うんって言って」
「じゃあって何！？意味わかんないよ！？」

僕お母さんと結婚するーっていうのは常套句だ。でも親の夢だ。実際もっと小さい頃にやってくれた時は萌え死ぬかと思った。やーんかわいー！！って叫んで抱きしめたもんだ。うん。
でも何かこれは違う。違う気がする…って！

「きゃーーーー！！！なにしてんの！」
「指にキス」
「しなくてよろしい！」
「や」
そんな大人の姿でや、とか！可愛いけど、大人の姿と口調のギャップにどきっとしちゃうけど！

「うんって言って、美咲」
「う、上目遣いだめーーー！！！」
何も考えないでうんって言いそうになった！危ないなおい！
「とりあえず落ち着こう。落ち着いてね、私のシオン」
「美咲はそのままね。落ち着かないうちにうんって言って」
「こらこらこら！」
いくら混乱してても気軽にうんって言っちゃいけないことくらい分かります！私の勘が告げてます！
「あのね、シオン。落ち着いてお母さんに一からお話しして？」
「可愛いからキスしていい？」
「お・ち・つ・け」
「ぐっ」
ああ、ごめんね、私の天使。思わず握られたままの両手で顎、殴りあげちゃった。痛かったね。でも呻きながらも私の両手離さないんだね。
「シオン。とりあえず手を離してね？お母さん、ちょーっとだけ離れてお話聞きたいわ」
涙目でふるふるしないで。可愛いから。元の姿ならもーっと可愛かったのかな。大人の姿でもちょっと腕が動いたもん。元の姿だったら我を忘れて抱きついたな、これ。
「お互い冷静にならなきゃ。だからちょーっとでいいの。離れましょ？」
「冷静になられたらますます見込みなくなるからいや」

何の見込みだ。

いや、本当は分かってるんだけど分かりたくないっていうか。信じたくないっていうか。だってだってだって！可愛い可愛い私の天使が！大切な大切な私の愛息子が！……本気でプロポーズしてきてるとかさ？

何でそうなったの？いつからそうなったの？まだ七歳じゃない。本気でプロポーズにはまだ早いよ？早いの！私が早いって言ったら早いの！はーやーいーのーよー！！

「ねえ、私の可愛いシオン。お母さんはいつまでもシオンのお母さんだから、結婚しなくても一緒なの」

「美咲は僕の母さんだけど、母さんだけじゃいや。結婚して」

「いやいやいや、お母さんはお母さんだけなんだよふつう」

「僕魔王だから普通一般の常識に囚われなくてもいいと思う。……っておばあちゃんが」

「母さんーーー！？」

可愛い私の天使に何吹き込んだーーー！！！

確かに血は繋がってない！私は異世界からきた一般人だ。平民だ。対して私の天使は王族だ。王子様だ。そして魔王様だ。どこにも血の繋がりを疑う要素はない。悲しいくらいにない。でもだ。でも育ての母も立派なお母さんなんだ！真剣な目で結婚してと言う息子に、喜んで！とか笑顔で言えるわけないでしょーが！

「今のうちに唾つけとかないと、どこの馬の骨とも知れない輩に攫われちゃうわよってことだから結婚して」

「母さんか！それも母さんか！私の天使になんてことを！！って、私なんかに惚れる男がいるわけないでしょう！自慢じゃないけど生まれて二十五年、一度たりとも告白されたことないんだから！」

「これからもないなんて言いきれないから、僕と結婚して。今は婚約でいいからうんって言って。愛してる」

「…っ、あ、あい、愛！？」

顔が恐ろしい勢いで熱くなったのが分かった。

愛！？愛してる！？今まで好きーだったのに愛！？いや、さっきも

言ってたけど、何か威力が倍増してるような気が…！何でだ！
ああ、しかもそんな綺麗な顔で、真剣な顔で、熱がこもった目でそんな台詞…！反則だ！反則だ！元の姿で言ってよ！そしたら私も愛してるー！って抱きしめたのに！心臓がやばいじゃないか！ちくしょう！

「愛してる、美咲。ね？僕のものになって」

…っ、耳元で囁かれた…！
これも母さん！？母さんの入れ知恵！？
心臓がやばい。破裂する。足がやばい。がくがくする。っていうか、腰抜けた…っ。

「美咲！？」
ああ、顔上げれない。
「どうしたの！？大丈夫！？どこか痛い！？」
声も出せない。今出したら変な声出そう。
「あ、おばあちゃん！美咲が…！」
……。おばあちゃんだとお？
「既成事実つくっちゃいなさい」
「七歳の子供に何てこと言うの母さんのばかあああああ！！！」
「きせいじじつって何？」
いいの。そのままでいて。いてね？お母さん、もういっぱいいっぱいだから！！
とりあえず今はどさくさに紛れて抱きついてきてる私の天使の顔を見ないように、親指立ててイイ笑顔してる母さんに文句を連ねた。

短編１３（魔王な息子七歳×異世界人な養母二十五歳）（後書き）

将来は僕じゃなくて俺とか私とか言えばいい。
可愛い私の天使はどこ！？な状態になればいい。
でも時々可愛い天使な自分を使ってお母さん翻弄すればいい。
想像したらわくわくします（え）

短編１４（片恋相手の兄×弟の友人）

はらはらと桜の花びらが舞い落ちる中、俺はただ立っていた。
強い風が吹いて次々と花びらが己を咲かせた木から離れていく。それでも目の前に立つ少女は変わらず、目を伏せてただ涙を流している。

弟の友人。
それだけは知っていた。
人懐っこい弟の数多い友人の一人。その中でも特別仲がいい友人の一人。他の友人と一緒に家に遊びにきていた姿を見かけたことがある。
バイトに忙しかった俺とはすれ違いだから、姿を見かけただけで言葉を交わしたことはない。今の今までなかった。

少女は泣く。声なく泣く。
目の前に俺がいることも分かっているのかどうか。もしかしたら認識していないのかもしれない。

家でみかけた少女はいつも笑っていたような気がする。あまりよく覚えていないけれど、いつも笑って弟の側にいた。もしかして弟が好きなのかなと思った記憶があるようなないような。
つまり俺にとって少女はその程度だった。記憶にしっかりと残るような存在ではなかった。
普通そういうものだろう？自分とは関わりのない人間をいちいち記憶に確かな形として残しておかないだろう？余程印象が強くない限り、その場で終わりだ。
そんな少女と向かい合っている。

姿を見かけたのは偶然。声なんてかける必要もなかったし、かけられても困るだろう。友人の兄なんて知らない人も同然だ。
なのに足が動いた。少女の前まで足が動いて、そこからぴたりと止まった。

俺の足が動くまでここには弟がいた。少女と弟の友人がいた。…いや、少女にとっては友人、弟にとっては恋人となった元友人。
つきあうことになったと弟と友人がはにかむように笑っていた。少女は一瞬固まって、すぐに取り繕うように笑っておめでとうと言った。全然気づかなかったと笑って言った。
俺も気づかなかったと思った。そもそもその友人を俺は知らない。家にきていたのか、きていなかったのかすら知らない。たまたま俺が会わなかったのか、少女以上に俺の記憶に残らなかったのか。どうでもいいことだけれど。

デート中なのだと言って仲良く手を繋いで去っていく弟と友人。
少女は笑顔で手を振って。二人の姿が見えなくなっても笑顔で。笑顔で、涙を零した。

その姿に恋をした。

＊

不思議だと思う。
隣でアイスを食べる人を見上げる。

出会ったのは春だった。桜が散っていく春だった。
春は恋の季節。その季節に友人は恋を実らせ、私は恋を失った。そんな日に出会った。

出会ったっていうのは可笑しいのかもしれない。この人は私の片恋相手のお兄さん。片恋相手の家に遊びに行くと時々姿を見かけた。バイトに忙しいらしくて出かけていく後姿だとか、片恋相手の部屋の前を歩いていく姿だとか。直接会ったことはなくて。話をしたこともなかった。

そういうものだと思う。私はこの人にとっては弟の友達の一人で、私にとってこの人は片恋相手のお兄さん。わざわざ交流を深めようと思うような関係じゃない。
そりゃ、恋人のお兄さんだったら交流を深めようと思ったと思う。でもそうじゃなかったから、あの人がお兄さんなんだ、と思ったくらいだった。…かっこいいなあと思ったのは仕方ない。皆言ってたもん。

その人とこうして隣り合ってアイスを食べてる。
一緒に出かけるのもこれが初めてじゃない。携帯の番号も知ってるしメールアドレスも知ってる。
その変化が不思議だと思う。こんなに近くにいる人になるなんて思ったこともなかったのに。

「なに？」
「おいしい？」
「うん。ほら」

差し出されたアイスに遠慮なくかぶりつく。うん。おいしい。
今度は私の持ってるアイスをはい、と差し出す。そっちも遠慮なくかぶりついてきた。濡れた唇を舌が拭うのが色っぽい。

「こっちもおいしいな」
「でしょ」

笑ってさっき差し出したアイスを今度は私が食べる。間接キスだーとか思ったけど、何度も唇同士でキスをしてるので今更。なのに毎回思う。
唇同士のキス。つまりはそういうこと。私は片恋相手だった人のお兄さんとおつきあいをしている。

桜が舞い散る公園。
片恋相手が友達と手を繋いで歩いてるのを見た。目が合った二人からつきあってるんだって言われて。それもほんの数日前からなんだって言われて。顔を見合わせては恥ずかしそうに顔を逸らして、でも幸せそうに笑う姿を見せられて。

そうなんだ、おめでとうなんて笑いながら。全然気づかなかったよなんて笑いながら。
本当は叫びたかった。嘘だって。私だって好きなのにって。その子よりずっと側にいたのにどうして私じゃだめなのって。告白もしなかったくせに、そう言って泣いて責めたかった。

それを必死で抑え込んで、デート中の二人を笑顔で見送りながら、知らない間に流れていた涙。
漏れそうになる嗚咽を噛み殺して、そっと目を伏せて。走馬灯のように思い出される失恋相手との思い出を、抵抗空しく眺めながら。

目の前に誰かがいたことにも気づかなくて。

「さっきからなに？」

「うん？」

「じっと見てくるだろ？何かついてる？」

「ううん」

怪訝な顔でこっちを見下ろしてくる恋人は、舞い散る桜の中、泣いてる私をじっと見下ろしていた。顔を上げた時にびっくりしたのを覚えてる。

人がいるなんて思ってなかった。ずっと泣いてるとこを見られてたなんて思わなかった。よりにもよって失恋相手のお兄さんに。

びっくりした私にこの人はハンカチを私の頬にあてて涙を拭いながら、クレープ好き？なんて聞いてきた。

何を聞かれてるのか咄嗟に分からなくて、でも口が勝手に好き、と紡いだ私に、ならちょっと待ってて。そう言って渡されたハンカチを思わず受け取って。走って公園に止まってる出張のクレープ屋さんの車へと走って。

「不思議だなって」

「不思議？」

「春にね、クレープ渡された時、大混乱中だったんだよ？」

「…ああ」

一体何がどうしてこうなった。頭の中はハテナでいっぱいだった。クレープを食べながら、おいしいとか呟きながら、座ったベンチに隣り合って座って缶コーヒーを飲む人をちらちらと見ていた。

「実は俺も自分が何してるのかさっぱり分かんなかった」

「あはは」

あの時には私を好きだったって聞いた。
失恋して泣いてる私に惚れたとか、いや、なんか何で？って思ったけど。どこに惚れる要素があったのかわかんないんだけど。でも好きだって思ってくれてて。

「あんな涼しい顔してたのにねー」
「うるさいな。内心これからどうしようって思ってたんだよ」

拗ねた顔が可愛い。
あははっとまた笑う。笑うな。そう言って頬を突かれる。

「痛い痛いってば。あはは」
「お前な」
「あ」
「ん？」

頬を突く指を掴んだ時、視線の先に見知ったカップルを見つけた。
恋人の弟、私の片恋相手だった人。
彼は彼の恋人と手を繋いで笑いながら歩いている。
仲がいい。思わず緩んだ頬。隣でじっと見てくる視線が驚いたようで。

「不思議だねー」
恋人を振り仰いで笑う。
掴んだ指を放して今度は五本の指全部と指を絡める。
「あんなに好きだったのに、平気」
「全然？」
「全然」
恋人が視線を弟へとやる。そしてまた私に。

じっと見て。それを見返して。絡めた指にぎゅっと力を込めて、笑う。

「大好き」

恋人がふっと笑って。
好きだよと囁いて、私の肩に頭を預けた。

春は恋の季節。
春に私は大事に抱えていた恋を失って。新しい恋の種を拾って。そうして春が終わって夏が始まろうとした頃に新しい恋を実らせた。

短編１５（短編１３と同設定）

それはある曇り空が素晴らしい日のことでした。
美咲だいすき、と可愛らしい天使の笑顔で言われた未婚の母、ついでにいえば出産経験もない母たる美咲は、お母さんも大好きー！と愛らしい愛息子をぎゅーっと抱きしめました。
じゃあ結婚してね、とぎゅうっと首に抱きついてくる愛息子に、大きくなったらね、と言いかけた美咲は、唐突ににやけた顔を真顔に変え、さーっと血の気が引いた音を聞きました。

危ねえ。マジ危ねえ。

美咲は冷や汗を拭って、腕の中の我が子ににっこりとほほ笑みかけました。顔色は最悪です。真っ青を通り越して真っ白でした。
対する愛息子はにぱあと花が咲き綻ばんばかりの笑顔。美咲は陥落しそうな心を叱咤します。

だめだ。騙されるな。今の私の天使は天使のふりをしている小悪魔だ。しっかりしろ。

しかし、しかしです。美咲の腕は今にも愛息子をぎゅうっとしそうです。したくてうずうずしています。理性に感情が逆らおうとしています。がんばれ理性。負けたら終わりだぞ。
美咲はがんばりました。がんばって、がんばって、お母さん、将来どんな子がお嫁にくるのか楽しみだわ、と言いました。
けれど愛息子は堪えません。負けません。可愛い両手で美咲の頬を包み、小首を傾げました。美咲が陥落してもいいかもしれないと呟くもう一人の自分を脳内で殴り飛ばした直後に愛息子は言いました。

「鏡みる？」
「見ません」

佐藤美咲二十五歳。愛息子シオン七歳。これは母と子の飽くなき戦いの物語である。

「母さん、何そのナレーション！」
「雰囲気を盛り上げようかと思ったのよ」
「いらないから！盛り上げなくていいから！」

「はい、しーくん、あーん」
「あーん」
「美味しい？」
「おいしい！」

美咲の膝の上に座る愛息子は、祖母から差し出されたスプーンに乗ったアイスに笑顔満面。
やーん、かわいーといつもなら悶えてぎゅうっと抱きしめる美咲は、愛息子からの求婚攻撃に疲れてぐったりだ。小さな肩に額を乗せている。

「おばあちゃんも、はい、あーん」

「あーん。美味しいわねー」
「ねー」
ちくしょう。私も混ぜろ。
「あ、そういえば美咲」
「なーにー？」
「しーちゃんの下僕候補がきたんだけどね」
「はい！？」
下僕！？私の可愛い天使に下僕！？いや！どこの変態がうちの子に目つけたの！！
シオンの肩からがばっと頭を上げた美咲に、あらー人殺しそうな目つきねーと義母、マリアが笑った。

マリア。この人に聖母マリア様と同じ名前を授けたのは一体どこの親だ。いやいや、ここは世界が違うんだから仕方ないっちゃ仕方ない。だがしかし！そう思った時期が美咲にもありました。

「何でもしーちゃんの前世の魔王に仕えてたんですって」
「はあ？そんなのうちのシオンに何の関係があるのよ。他人じゃん。無関係だ」
「そうでしょ？なのにしつこいのよねえ」
「しつこい」
シオンも頷いた。
眉間に皺が寄っている。

何でもその変態はシオンがマリアと食糧調達のために森を歩いていた時に現われたらしい。
ようやくお見つけいたしました魔王様、とか言って近づこうとして、隣にいたマリアに気づいて、貴様陛下がお小さいのをいいことに害

なそうというのかとかなんとか言いだして攻撃をしかけてきたらしい。
むかっとしたのはマリアだけではない。美咲には及ばなくとも大好きな祖母に攻撃をしかけてきた変態に持ったのは悪感情。
ざけんな痴漢とマリアが頭を力いっぱい蹴り飛ばして。
おばあちゃんに近づくなとシオンが見えない力で体をブッ飛ばして。
普通なら死んでる。これ絶対死んでる。
マリアに側頭部を蹴られたのだから頭が向かうのは横だ。なのにシオンは腹に力をぶつけたというのだから体が向かうのは後ろ。全然違う方向だ。
それでも変態は生きていたらしい。乳母として雇っていらっしゃったのですか申し訳ありませんと言ったらしい。誰が乳母だ痴漢、とマリアに頭を踏まれて。おばあちゃん、そんなの踏んじゃ汚いよとシオンに言われて泣いていたらしい。
……何故か嬉しそうだったとシオンが首を傾げたのに、本当の本当に変態だ。金輪際うちの子に近づかせないでとマリアに力いっぱい頼んだ。

「とりあえずあの痴漢はしーちゃんの魔力が発動したのに気づいて探してたんですって。しーちゃん最近魔力使えるようになったし、練習もしてるからそれでかしらね」
「え、じゃあ他の魔族とかもくるかもってこと？」
「そ。でもねえ、その痴漢によると、痴漢がしーちゃん探しに行くのに誘った相手はね、しーちゃんからの招致があるならともかく、ないなら今まで通り生活するから行かないって言ったらしいのよ」
「へえ」
「ほら、魔王が勇者に破れてもう結構な年月が経つでしょう？というか、正確な年月知ってる人もいないし、それだけの年月が経てば

魔族も魔王がいない暮らしに慣れたんでしょうねえ。だから痴漢が多数派なのか少数派なのかはわからないけれど、魔族全員集合ってことはないでしょうね」
「いっそその痴漢だけにしてほしい」
「同感ね」
うんうんと頷きあって。
シオンがらぶらぶ生活邪魔しないでー、と片頬を膨らませた。可愛い。思わずにやけた顔で膨らんだ頬を人差し指でつついて気づく。今何つった？らぶらぶ生活？誰と誰のだこら。

「でも他のもきたら厄介ねえ。美咲、気をつけなさいよ？」
「何でピンポイントで私？シオンが一番危ないでしょ」
「あら、美咲よ？迎撃できないでしょう」
「できないけども」
ってか、母さんはできるの？あ、ごめん。愚問だった。できるんだね？ごめんなさい。
「城には結界はるから、外に行くときだけ皆でいっしょ」
ね？とシオンが美咲を見上げて笑う。天使の笑顔だ。やあんもうかわいー！！な気持ちのままに抱きしめて、新婚旅行までにはなんとかしたいわねえ。そんなマリアと旅行？皆で行きたい！無邪気なシオンに、おい、と、きゃー、に美咲は忙しかった。
それでも一度マリアと話し合う必要があるかもしれない、とシオンに新婚旅行とは何かを誇大して教える母を止めながら思った。

短編１５（短編１３と同設定）（後書き）

今度は見た目も七歳児です。
冒頭を思いついたので書いてみたんですが、痴漢は何で出てきたんだろうか…。
書いてたら勝手に出てきました。何でだ…。

短編１６（勇者から魔女にシフトチェンジした女）

助けてなんて都合のいいことだと思わない？
だってこの世界の人達が何をしてくれたと言うの？強制的に連れてきて、一方的に助けを求めて。あなたしかいないのだなんて。あなたが最後の希望なのだと。世界を助けてなんて。

ああ、本当に自分勝手よね。私の知らない世界でそんなこと言われたら、ねえ？脅迫じゃない。この世界には私の味方なんていないんだもの。みんな勇者を求めるの。世界の命運を背負わせて、勇者が動けば世界は救われるという前提で私を戦いに駆り出そうとするの。

ならばこの世界にいる間の衣食住が保障されるのは当然でしょう？
そちらが頼む立場なのだから。強制的に役目を背負わせたのだから。
まだまだ足りないくらいだわ。そうは思わない？
生まれ育った世界から引き離されて。無理やり命を奪う役目を背負わされて。縁もゆかりもない世界のために命をかけさせられて。まだまだまだまだ足りないわ。当然でしょう？

「ねえ、そうは思わない？シルフィ」
「そうね」
ソファにうつぶせて足を上下に動かしながら言う波打つ黒髪を肩まで伸ばした女、エリーゼにシルフィは本に目を落としたまま頷く。
ソファの上に揃えた両足は、リズムをとるようにソファを叩く。そのたびに膝に乗った本が揺れるのだがシルフィは気にしない。
「シ～ルフィ～？聞いてるの？」
「聞いてるわ」
「なら反論はないの？」

「反論？」
顔を上げたシルフィは眉を寄せる。
「その通りだと思うけど？」
「腹立たしくは思わないのかしら？」
だってあなたは衣食住すら保障されなかったじゃない、とエリーゼが首を傾けた。
それにああ、とシルフィが頷く。

突然放り出された右も左も分からない世界。
人気のない道にぽつんと座り込んだシルフィは、五人の子供を馬車に乗せたガラの悪い男三人に拾われた。売るために。
逃げようとすれば髪を引っぱられて引きずられた。頬を張り飛ばされた。何が何だか分からなくて。怖くて。泣けば怒鳴られ、酷い時は殴られた。
売られた先では隙間風吹く小屋が住処だった。纏う服はボロ。食事もまともに与えられず、使い捨てとばかりにこき使われた。
…真実使い捨てだったのだろう。シルフィが買われる前日に一人死んでいた。シルフィが買われて一か月後にまた一人死んで、翌日一人買われてきた。
使い捨ての道具。壊れれば新たに買えばいい。だからこそ酷使された。
朝も昼も夜も関係ない。寝ていても主が呼べば叩き起こされ、暗闇の道を走ったこともある。体調が悪くても主の愛娘のために恋が叶うと女性の間で噂されるハート形の石を探しに行ったこともある。

「でも代わりに主様に拾っていただけたわ」

愛娘の我がままで美容にきくと噂される水を汲みに入った森で死にかけた。
栄養を与えられない体は痩せ細って。力もろくに出なくて。頭は朦

朧として。転んだが最後、もう動けなかった。
ああ、死ぬんだ。
そう思ったその時だった。シルフィという名前をくれた主に会ったのは。

「主様ねえ。ヴィンリード・エヴァンス。今や人間の裏切り者と呼ばれるノードルド王国元宰相補佐様」
「主様が拾ってくださって、元の名前を忘れてしまった私にシルフィという名前をくださって。私を必要としてくださった。何にも代えがたい大切な大切なお方」
その方と出会えたのだもの、衣食住が保障されていたあなたを苛立たしくなんて思わないわ。
そう口元を緩めるシルフィにエリーゼは呆れたように、けれど微笑ましそうに笑った。

どういう時間軸になっているのか。シルフィとエリーゼは同じ世界、同じ時代に生まれていた。この世界では百年以上の開きがあるというのにだ。
エリーゼはもう正確には覚えていないが、百年以上前にこの世界に召喚された。勇者として。そして魔王を倒した。
その後、エリーゼは元の世界に戻ることもできず、この世界で生きることになったのだが、エリーゼは勇者だ。魔王を倒した勇者。そうである以上、魔王を倒してなお勇者として常に最前線にいた。

エリーゼの存在は牽制に最適だった。
エリーゼの存在は最強の武器だった。

エリーゼに助けを求める国民。
エリーゼで利益を得る国。

エリーゼが勇者であることを捨てたのも、エリーゼを知る誰もの前から姿を消したのも、全て全てはそれ故だと、誰も気づかないままエリーゼの名は歴史の中に埋もれていった。

勇者としてのエリーゼの名は、だけれど。

「ほーんと、大好きねえ」
「ええ。お慕いしているわ」
「日本人らしい恥じらいはどこへいったの？」
「ふふ。あなたこそ、曖昧な言葉で場を濁す日本人はどこへいったのかしら？」

今や魔女として世界に名を馳せている元勇者。
魔女。
己の好奇心に正直な善悪の区別のない存在。
そう世界では言われている。
己の中で存在するルールに従い、世界のルールを容易く破ってしまう存在。

「曖昧な言葉は相手の好きに解釈されるもの。もううんざりよ」
空気を読んで。傷つけないように言葉を選んで。話が進まないからと妥協して。
そうしてこの世界で得たものなどなかった。ならば自分の好きなように生きてやる。故郷を奪われて、家族を奪われて、友人を奪われて。そうして己までも奪われるくらいならば。

「魔女と呼ぶなら呼べばいいのよ。勇者様なんかよりよっぽどいいわ」

口元が吊り上る。
目は笑ってはいない。
今見ているものはシルフィではないのだろう。だからシルフィはそうね、と頷いて視線を本に落とすと、

「あなたが勇者のままだったら会えなかったわね」

そう言葉を零す。
エリーゼはきょとん、として、そうしてふわりと笑った。

「シルフィ。ヴィンリード。もう、聞こえないのね」

折り重なり合う二人の男女の側にエリーゼは姿を現わす。
つい先程までここは戦場だった。新たに現われた魔王の居城へと行くために必要な五本の鍵。その一本がこの城にあったからだ。
鍵の番人であったヴィンリードとその忠実なる僕であるシルフィ。

その二人と戦った相手は勇者一行。エリーゼと同じ世界から召喚された少女だ。

分かっていた。二人は死ぬだろうと。勇者に負けるだろうと。二人だって知っていた。きっと勝てないだろうと。それでも戦った。そうして、命潰えた。

「…まあったく、幸せそうな顔だこと」

二人揃って微笑んでいるようにも見える。

異なる世界で生まれ育ち、同じ世界で出会い、そうして一緒に生きて、一緒に死んでいった二人。

長い長い間生きてきた。その中で出会った人と死に別れたこともあった。けれどこの二人ほど幸せそうに死んでいった人とは会ったことはなかった。

ヴィンリードを主と呼び、生きる意味と定め、命を捧げることを幸せと微笑み続けたシルフィ。

シルフィを僕と呼び、共に生きる存在と定め、存在ごと腕に抱きしめ離さなかったヴィンリード。

出会ってから最期までずっとそう在り続けた二人にエリーゼは笑う。本当に最期までずっとずっとそうだった。

「さ、てと。そろそろ勇者達が鍵を手に入れた頃かしら。あなた達の望み通りあなた達を私の炎で包んであげるわ。あなた達が一緒に過ごしたこの城と一緒に」

死を迎えても、魂が抜けた体が離れないように。魂はずっとずっと

一緒にいるだろうけれど、体ばかりはもうどうにもできないから。だから生を終えたならば一緒に燃やしてほしい。死ぬ時は必ず一緒だから。

示し合わせたわけではないだろう。それぞれに違う時間にそう言われて、思わず呆れを通り越して感心したのを覚えている。

「おやすみなさい、私の友人達。もしも輪廻転生があるのなら、きっとあなた達はまた一緒にいるのでしょうね」

炎が生まれた。

燃える城を木の枝に腰かけて眺めながら、下で呆然としたように燃え盛る炎を見つめる勇者に声をかける。心は一緒に燃えていく友人達の元にあるけれど。

「あれでいてね、あの二人独占欲強いのよ」

ああ、ねえ。この世界なんて大っ嫌いだけれど。もう私を召喚した

人達は誰もいないけれど、相も変わらず召喚に頼るこの世界が大っ嫌いだけれど。
あなた達と会えたこと、一緒に過ごせたこと。それだけで少しだけ好きになれたのよ。

「…だ、れ？」

ねえ、勇者様？
あなたはどうなるのかしら。私と同じ世界から同じように召喚されて勇者の肩書を背負わされたあなた。けれど私と違ってそれを受け入れ、自分の意思で世界を救いたいと願うあなた。
私と同じ道を行く？それとも違う道を行くのかしら。どちらでもいいけれど、全てを終えたあなたをこの世界はどう扱うのかしらね？
その時、私はまたこの世界を大っ嫌いになるのかしら。ほんの少し、好きになれたこの世界を。

友人達がいない今、それはあなたにかかっているのよ、勇者様？

短編１６（勇者から魔女にシフトチェンジした女）（後書き）

シルフィとヴィンリードと勇者も書けたらいいなと思います。

短編１７（召喚・拒む少年と受け入れさせようとする国）

勇者。
勇者。
勇者。

枢（かなめ）は一介の高校生には不釣り合いなほど豪華な部屋で、一生のうちに一度でも体験できるかできないかぐらいふかふかの高級な布団で目が覚めた。

我々を救ってほしい。
彼の国から我が国を守ってほしい。
国の存続を脅かすあの脅威を滅ぼしてほしい。

寝かせた体を起こして、くあっと欠伸をひとつ。
ベッドから足を下ろせば柔らかい絨毯の感触。一歩一歩足を進めて窓から青い空を見上げる。まだ朝早いせいか薄い青。腕を組んで窓にもたれれば、一緒に眠っていた狐が足元にすりよってきた。抱き上げて体を撫でれば気持ちよさそうに声を漏らす。

「勇者召喚、ね」
「クゥ？」

狐が顔を上げた。

「知ってるかい？この国の歴史書を呼んだんだけどね、建国されたのが五百年前。初めて勇者が召喚されたのが三百年前。僕で召喚された勇者は三人目」

狐を見下ろして口元を上げる。

「そのどれもが戦争が避けられないっていう状況なんだよ」

「クゥ」

「そう、つまりこの国は初めから自分の力で戦うことを放棄してるってこと。自分達で戦うよりも勇者が戦う方が勝算が高いし、自国の被害も最少ですむ」

心配そうに見上げてくる琥珀色の目にそっと口づける。咄嗟に閉じられた瞼は柔らかい。

「戦争が終わった後の勇者は元の世界に帰らずにこの世界に残ってる。歴史書によるとね、初めの勇者は世界を知るためにと旅に出て、二人目の勇者は王女と結婚して王位を継いでる。これが意味するところが分かるかい？」

初めの勇者は始末されたのだろうと枢は言う。国と勇者の間で何があったのかは知らない。ただ用無しと始末されたわけではないだろう。国を勝利に導いた勇者を手放すには弱すぎる理由だ。

枢が考えられる理由としては、戦争が終われば元の世界に帰れるのだと聞かされていたのに、実際終わってみれば国に留めようとする動き。それで勇者と国の間でひと悶着あって。そのせいでこの国を出ていこうとした勇者を他国に奪われまいと殺した。

二人目の勇者は望んで残り結婚し、王位を戴いたのかもしれないが、もうひとつの可能性がある。

これもまた国が勇者を留めんがための策略。勇者を手放さないための策略。他国に奪われないために、自国の剣となり盾となる勇者を国に縛り付けるための策略。

「…クゥン」
伸び上って頬を舐めてくる狐にくすくすと笑う。
ぎゅっと狐を抱きしめて、大丈夫だよと囁く。

「これは憶測にすぎないからね。真実は違うかもしれない。でも用心は必要だろう？僕も勇者だからね」

コンコン、とノックの音。
朝を告げる声。

「面倒だね。今日もまた僕を戦わせるための説得を聞くのかな」
「クゥ」
「ふふ、怒ってるかい？でももう少し我慢してよ。向こうもそろそろ痺れを切らしてる頃だろうしね」

そうしたら、ねえ？
そう笑った枢の顔は、一介の高校生が浮かべるには可笑しなほどにぞっとするものだった。

神に愛された土地があった。
その土地に建国を許された王は、土地を守るそのために神からひとつの魔法陣を授かった。

召喚陣。
王はその召喚陣を使って国を治めた。
神との約束のために。それが神から与えられた王の存在理由。

「あれが勇者だなんて俺は認めない！あんな臆病者に何ができるっていうんだ！！」
「落ち着きなさい。彼は勇者です。あなたも見たでしょう？召喚陣から現われた彼を」
「だが、国の大事に力を貸してくれるのが勇者なのだろう！？国を守るために現われるのが勇者なのだろう！？なのに何だあの男は！」
「私も戸惑っています。まさかあれほどに頑なに戦うことを拒絶するとは」

おかげで民へのお披露目もままならない状態だ。
戦争が近い。それを民も感じ取っている。だからこそ安心させたいというのに。なのに肝心の勇者にやる気がない。戦いに賛同しない。好意的な様子を見せない。むしろ一般人を無理やり戦場に追いやろうとする極悪非道。そんな言い回しをされる。

一体どういうことなのだろう。
歴代の勇者は戦ってくれた。国を守ってくれた。勇者とはそういうものであるはずだ。国の危機にかけつけ、救ってくれる存在のはずだ。なのに。

憤る騎士団長と頭を抱える宰相の耳に、パンッと手を打つ音。
はっとして振り向けば、そこにいるのは彼らの王。

「あの子供が勇者であることは間違いない。召喚に応えたのはあの子供だ。そして見ただろう？頑ななあの子供を殺して新たな勇者をと望んだ愚か者の剣をあの子供はどうした？」

一人でいるところを見た。勇者を襲う影も見た。
駆けつけるには遠すぎて。けれど勇者は怪我ひとつ追わなかった。
彼が放った光。それが彼に迫った凶器を弾き、折った。

「彼が身を守るために咄嗟に放った力。あれは俺達には使えない、勇者だけのものだ」
「ですが…っ」
「いいか？あの子供が受け入れなくともあの子供は勇者だ。そして身を守るためならばその力を発揮する」
「陛下…？」

王が冷たい目で二人の部下を見る。
ごくり、と二人が喉を鳴らした。

「勇者はこの国を救うために現われる。たとえ子供が拒絶しようとそれは絶対だ。だがあの子供は耳を貸さない。ならば戦うしかない状況を用意するだけだろう？」

戦ってもらわなければならない。それが勇者の役目だ。この国を守るために戦う。それが建国した王と神との約束だ。勇者がそれに抗おうとしても、神との約束が破棄されることはない。

「開戦は近い。それをあの子供には聞かせるな」
知る時は戦場の只中だ。
二人が頭を下げた。

＊

「嫌な風が吹いてるね」
「クゥ？」
馬車に揺られながら枢が空を見上げる。快晴。入り込む風は生温い。
狐が落ち着かないのもそのせいだ。すっきりと晴れた空なのに、生温い風が体を撫でる。それが気持ち悪い。空と地上のこの差が気持ち悪い。
枢が狐の喉を撫でる。
「気持ち悪いかい？あと少しだから我慢しな」
「クゥ…」
不服そうな声に笑えば、馬車が止まった。
開けられたドア。降り立った先に広がるのは騎士団。武装した彼らが整列している。その視線の先に立つのは王。こちらを見て目を細めた。あれは嗤っている。これでもう逃げられまいと。
枢は無表情で王を見返す。腕の中で狐がぐるるると王へと威嚇した。
騎士団員が一人こちらに武器を差し出す。視界の隅で騎士団長が嫌味な笑いをした。臆病者と幾度蔑まれたか。

「いいか。我々はこの戦いに勝利しなければならない！我が国を守れ！民を守れ！案ずるな、神との約束に従い、勇者もこの地に降臨した！何も恐れることなどない！」

おおおおお！！！

地響きかと思うほどの声、声、声。

愚か。

嘲笑った枢の声は聞こえない。

勇者の召喚。

それを初めに考えたのは三百年前の王。

神が初めの王の授けた召喚陣。今まで人間を召喚したことなどなかったその召喚陣。もしかしたらできるのではないかと。

召喚陣は神が国を守るためにと与えたくれたものだ。

今回の戦争には国の存亡がかかっている。国を勝利に導くために、力溢れる者が呼べぬ道理はない。

それは開戦間近の時だった。

対戦国は自国よりも軍事力に優れており、勝てる見込みなどなかった。それでも戦わねばならなかった。属国に下るなど冗談ではなかった。

神との約束。
初めの王が神と交わした約束。
それがこの国の王にとっては他国にはないものと優越を与えるものだった。他国よりもこの国こそが、と驕るに十分なものだった。
だからこそ他国に下るということに我慢がならなかった。神に選ばれた国なのだ。誰が選ばれなかった国に、誰が自国よりも劣る国に。
そうして彼らは呼び出した。力溢れる存在を。国を勝利に導いてくれる存在を。勇者を。

勇者が差し出された剣を手に取り、王から視線を外した。そうして歩みを進める先は敵陣営。
そう。それでいい。それこそが勇者の役目だ。神との約束に従い、この国を守りし者。
つ、と口元が上がる。
が。
「な…っ」
中央で足を止めた勇者が剣を投げ捨てた。それも王へ向けて、だ。
それを前に出た騎士団長が剣を弾き飛ばし、どういうつもりだと勇者に叫んだ。

「愚かだね。召喚陣をこんなことに使うなんてさ」
「クゥ」
同意するように狐が鳴いた。
狐を肩に乗せてその頭を撫でる勇者は、その手つきの優しさとは裏腹な冷たい冷たい目を国王に、いや、こちらの陣営全てに向けた。
「人間の変化を甘く見すぎてたのかな。それともいくら血を継いではいても別人ってことなのかな。語り継ぐ言葉も歪んでるみたいだしね」
「何を言っている。お前は勇者だ。神との約束に従い、我らの力となるために降臨した勇者だ」
「それが歪んでるって言ってるんだよ」
口元を上げて嘲笑った勇者に後ろの兵士達が戸惑い、ざわめく。
「そもそも魔法陣は人間の目には見えない精霊達を具現化させる場。つまり精霊達に教えを乞うために与えたものなんだよ。この土地を守るための助言を乞うためのもの。分かるかい？君達を助けるためのものじゃない。ましてや力溢れる人間を召喚するものなんかじゃ決してないんだよ」
何を馬鹿なことを。
嘲笑う王に、神との約定を歪めた報いを受けてもらおう。勇者が言うなり、勇者の肩に乗っていた狐が姿を消した。
代わりにに現われたのは一人の少年。狐色の髪と琥珀の目をした少年が手のひらをこちらの陣営に向けた。そして一瞬駆け抜けた風。
一体何をしたと憤る騎士団長を無視して、勇者が少年の頭を撫でる。
その目は優しい。

「いい子。これでもうこの国は召喚術を使えない」

金輪際、ね。

そう口元を上げてこちらを見たその目は、嫌悪を多大に乗せていた。

神に愛された土地があった。

その土地に建国を許された王は、土地を守るそのために神からひとつの魔法陣を授かった。

召喚陣。

王はその召喚陣を使って国を治めた。

神との約束のために。それが神から与えられた王という存在の理由だったから。

国を、民を守るためではない、神が愛する土地を守るためにこそ使われた。それが王の役目だった。神から与えられた存在理由だった。

神に愛された土地。

愛されたのは国ではない、土地なのだと。

いつしか忘れられてしまったのだけれど。

戦争が始まった。
枢は参加しない。その代わり敵軍に守りを与えた。強力な防御の魔法をその身にかけた。

神が愛した土地。
それは神にとって居心地のいい気を放つ土地。神が住まう天上の館までその気は届き、神を癒す。そんな土地。
その土地に国を築く代わりに建国の王はその土地を守ることを約束した。
そのために与えられた魔法陣。人間よりも永きを生きる精霊たちから助言を得るための媒介。

「国のことなんて僕はどうでもいいんだよ。僕が愛しているのは土地そのものだ」
「はい」
「僕は建国の王を信じた。彼は僕が愛する土地を守ると誓った。その代りに行き場を失くした者達のために国を築かせてほしいと願った」
「はい。彼の王は誓いを守りました」
「うん。彼の子供も、孫も皆守った。僕の愛する土地は汚されることなく清浄なまま守られた」

けれどそれももう歪んだ。
土地の上に国が建った時点で、多少の変容はあるだろうとは思っていた。それでも土地を穢すほどの変容などそうないだろうと思って

いた。約束を交わした建国の王がさせないだろうと。
土地が放つ気に穢れが混じっていることに気づくまでは。

「異世界から人を召喚して、国のために戦わせて。それも全部枢様との約束の内だなんて歪んだ解釈をして」
「建国の王と交わした約束は歪められた。土地を穢し、本来、助言者たる精霊を呼び出すために与えた召喚陣を悪用した罪は重い」

建国の王を信じていた。
彼は確かに約束を果たしてくれた。歴代の王達は果たし続けてくれた。だから持ち直すことを期待した。それが儚い期待だと知らずに。

もう許せる域を超えた。これ以上愛する土地を穢されることは我慢ならなかった。
どうするべきか。いっそ雷を落として焼いてしまおうか。炎は何もかも燃やしつくすだろう。そうして炎が鎮まった頃には土地の穢れは浄化されているだろう。

それを実行しようとした時、異世界との道が繋がったことに気づいた。どこと繋がったのか。枢が与えた魔法陣。
瞬間、口元が吊り上ったのだと狐色の髪と琥珀の目の子供が言っていた。背筋を冷気がなぞっていくのをはっきりと感じるほどの笑みだったという。
抱えていた不快感。憤りが一気に膨れ上がったからだろう。

雷を落とす。その案を暫し頭の片隅に留め、枢は別の手をとることにした。繋がった道を強制的に歩まされようとしている異世界の人間と己がすり替わることに。
勇者として召喚されようとした人間は元の世界に留め、代わりに己の身を働いている強制力に絡めとらせた。寸前、飛び込んできた狐

は予想外だったが。

「召喚陣はもう使えない。何も召喚できない。壊してしまったからね」

「枢様、決着がつきそうです。…弱いですね」

「当然だよね。勇者の力に頼ってたんだからさ。こんな大きな戦争に勝てるほどの力なんて、この国は持ち合わせていないんだよ」

戦争に負け、神に選ばれた国と謳っていた国は神の怒りを買った国と名を変えるだろう。けれどそれも一時のものだ。すぐに浄化しなければ。燃やしつくさねば。

「他国に逃げる時間くらいはあげるよ。けれどもう二度とこの土地に国は建たせない」

ね、琥珀。

隣の少年の頭を撫でて、うっすらと笑った。

短編１７（召喚・拒む少年と受け入れさせようとする国）（後書き）

召喚された少年が実は神様だった、という話を書きたかった。
狐が一緒なのは、唐突に狐と戯れる少年は可愛いと思う、と思ったせいです。

短編１８　（シスコンな友人を持った少年）

あの男はだめ。いや。ね？俺やだよ、姉さん。

立ってる姉に座ってる弟は心なしか潤んだ目で、しかも上目遣いで言った。声が震えていた。

うっと呻いた姉の腰に抱きついた弟は姉さんやだ、と呟いた。

「…ホントお前、手段選ばないな」

悟が口元をひくつかせて言うのに、上総はうるさいと睨みつける。

「和葉は俺のなの。他の男なんていりません」

「いやいやいや、お姉ちゃんだろ。お姉ちゃんは俺の女にはできません」

「うるさいな。弟が姉を独占して何が悪い」

「姉離れしなさい！」

「いーやーだー」

ふんっと顔を背けた上総に悟は頭を抱える。

分かってる。こいつのシスコンは重症だ。なかなか可愛い姉の和葉に寄ってくる男をことごとく追い払い、和葉が男に淡い思いを抱けば敏感に察知し阻止する。

「お前このままじゃ姉ちゃんにだけじゃなくさ、お前も恋人できねえじゃん」

「和葉いるのに恋人なんているわけないだろ」

馬鹿？

そんな人を馬鹿にした目で見る和葉の首を絞めてやる。

「おーまーえーはーーー」

「俺がシスコンでもお前に迷惑かかってないだろ！ほっとけよ！」

「このままエスカレートしそうでやなんだよ！」
えーんっ、和葉の首から手を放して机に突っ伏す。

中学校の入学式で知り合った時、すでにシスコンだったこの友人。
入学式が終わるや否や体育館の前で何故かはらはらした様子で待っていた在校生が和葉に飛びついたのを見た時、姉弟仲がいいんだな、なんて呑気に思っていた自分を殴ってやりたい。
あほかお前！ヤツはシスコンだ！病的なシスコンだ！いいか！一に和葉、二に和葉、三四も和葉で五も和葉だ！それは年々エスカレートするんだ！いいか、するんだぞ！！
……いつか禁断の関係を得るための策を練りそうで怖いのだ。

「お前のシスコンに比べたらお前の姉ちゃんのブラコンなんて可愛いもんだし」

そう、姉の和葉もブラコンなのだ。弟が可愛くて可愛くてたまらないのだ。友達より弟で、両親より弟で、好きな人より弟なのだ。
見るとどきどきする相手を弟が嫌だと言って、あいつよりも俺を見て、な言葉にうん！と力いっぱい返事をして、可愛い大好き！と抱きしめる。そんなレベルのブラコンだ。弟ほどではないがこっちも重度だ。
けれど弟のように、上総は私のだから、他の女はいりません、な言葉は吐かない。上総に彼女ができたら寂しいな、ちょっといやだな、な程度だ。何が何でも阻止してやるとは思わない。

「お前さえ彼女作れば万事解決なのになあ」
「しつこい。夢見る乙女」
「違う！っていうか、夢！？夢なのか！？いつか現実にしてくれよ！！」
「いや」

いつの間にか携帯を取り出してじっと見ているものが何か。聞くまでもない。上総の待ち受けは上総だ。しかも一週間ごとに変わる。

「あ、上総ー！」

「姉さん！」

教室の入り口から聞こえた声に、目にも止まらぬ速さで携帯を閉じて声の主のところまで瞬間移動した上総の残像に、悟はもう遠い目だ。

「今日、一緒に帰れる？」

「帰れる」

「あのね、今日行きたいところがあるの」

「いいよ。つきあう」

「ありがとう！本当は清水くんにつきあってもらおうと思ってたんだけど、上総いやって言うから」

「うん。いや。俺がつきあうから他の男はだめ。ね？」

「う、うん！上総可愛い！！」

和葉の両手を握って顔を覗き込むようにして言った上総に、和葉が頬を赤らめて抱きついた。

これ幸いと思いっきり抱き返す上総はシスコンだ。もう一歩足を踏み込んだら禁断の関係になりそうなくらいのシスコンだ。

「本当、お前さえ彼女作れば俺の心労もなくなるのになあ」

はあああっと大きなため息をつく悟は、姉さん、今日も一緒に寝てね、なんて言ってる声を耳にして、ごんっと机に頭をぶつけた。

短編１８　（シスコンな友人を持った少年）（後書き）

終わりどころが見つからなかった…。
とりあえず弟に恋愛感情はありません。あれでもないんです。本当にない（しつこい）。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0349q/

短編集

2011年9月19日10時25分発行